みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Mahādevapūjā : Mithilā地方の事例報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永ノ尾, 信悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004301

Mahādevapūjā

——Mithilā 地方の事例報告——

永ノ尾　信　悟*

Mahādevapūjā: A Study of a Daily Ceremony Performed in Mithilā

Shingo EINOO

The *Mahādevapūjā* is a combination of the enlarged *saṃdhyā-upāsana,* which originated from the vedic period and the hinduistic deity worship, *pūjā.* It is named after the main deity in the part of the *pūjā, i.e., mahādeva* or *śiva* who is represented by eleven clay *liṅga* figures. A brahmin householder performs it daily, in the morning. The procedure is as follows: a performer washes his teeth and body, puts on new clothes, and prepares the place for the ceremony, usually on the veranda of his house. With the *gopīcandan* clay he makes marks on his forehead and other parts of the body, sets the ceremony utensils in order, and begins the *saṃdhyā-upāsana.* Its constituent parts are: 1. *prāṇāyāma,* or restraint of breath; 2. *mārjana,* or sprinkling oneself with water; 3. *aghamarṣaṇa,* or wiping-off evil; 4. *sūrya-upasthāna,* or worship of the sun; 5. *gāyatrī-japa,* or mute muttering of the *gāyatrī mantra*; 6. *tarpaṇa,* or satisfying by offering water of gods, sages and ancestors; and 7. *sūrya-arghya,* or offering water to the sun. After completion of the *saṃdhyā-upāsana,* the performer again makes marks on his forehead and body, this time with ashes, and arranges the utensils for the deity *pūjā.* The deities worshipped are: 1. five gods beginning with *Sūrya*; 2. *Viṣṇu*; 3. *Narmadeśvara*; 4. *Lakṣmī*; 5. *Sarasvatī*; 6. *Durgā*; 7. *Bhuvaneśvarī*; 8. *Dakṣiṇakālī*; 9. *Śītalā*; 10. *Viṣaharī*; 11. *Hanumān*; 12. *tulasī*-tree; 13. *Kīrti-mukha*; 14. *Mahādeva*; and 15. *Brahmā.* In the *pūjā* for *Viṣṇu,* two *śālagrāma* stones are treated as representing *Viṣṇu,* and the famous *puruṣasūkta* from the *Ṛgveda* is recited. *Śītalā* and *Viṣaharī* can be seen as local deities of Bengal cultures. *Bhuvaneśvarī*

* 国立民族学博物館第3研究部

and *Dakṣiṇakālī* belong to the tantric deities. The list of the gods shows that this *Mahādevapūjā* is of synthetic character, including not only the śivaite gods but also the viṣṇuite and local deities. In this sense it betrays the common figure of present day hinduism. A description of this *pūjā* is based on observations made twice in 1987 and 1988, in Mithilā, in northern Bihar. The sources of the accompanying *mantras* are traced, as far as possible, but not thoroughly, to the vedic and other literatures. The distribution of the sources of the recited *mantras* shows that, in forming this *Mahādevapūjā*, the late vedic *pariśeṣa* and the *purāṇa* litertures have played a very important role. It can be suggested provisionally that, by following the development of this daily ceremony in the different stages of sanskrit literature from the vedic to the *purāṇas*, a model of hinduization of the vedic tradition can be developed.

はじめに
　調査地の概要
　マハーデーヴァ・プージャーの概要
　マハーデーヴァ・プージャーの式次第
　記述方法と資料
本論 —Mahādevapūjā の記録—
　I 準　備
　II 朝の勤行
　III 神々へのプージャー
おわりに
　saṃdhyā-upāsana に関して

は　じ　め　に

調査地の概要

1987年12月から1988年1月と1988年9月に二回，ビハール州北部のミティラー地方で調査のために滞在した。ここで報告をするのは，その間，マドゥバニ近郊の，ミティラー絵画で有名なJ村で見たマハーデーヴァ・プージャー (Mahādevapūjā) である。この儀礼の伝統は古くヴェーダの時代までさかのぼることができる。そして，この儀礼の変遷の過程をヴェーダ期の文献から現在に至るまで，文献的に追跡することができる。この報告の一つの目的は，この儀礼を文献的に追う作業の出発点となる現在の実際を確認することである。

ミティラー地方は英国統治時代ティルフート (Tirhut) の名で呼ばれていた地域で，ヴェーダ文献にいうヴィデーハ (Videha) 国にあたる。Mithilā という名称は

Mahābhārata, Rāmāyaṇa および Purāṇa 文献以降に用いられるようになり，現在この地方の人々は再びこの古い名称を用いるようになった [MISHRA 1979: 5–13][1]。このミティラー地方は村落レベルのバラモン文化の伝統がよく保存されているところである [MAITRA 1986]。今日でも，カルカッタ，ベナレスそしてデリーなどの大都市のヒンドゥー寺院の司祭としてこの地方からかなりの数のバラモンが出かけていっているという。

南のガンジス川，西部のガンダキ川そして東部から中央部にかけて流れ込むコーシー川に囲まれたこの地方は一面の平原地帯で，目をさえぎるのは集落の近くのマンゴーや竹を中心とした林ぐらいである。主なる農産物は米，サトウキビ，マスタード油それにマンゴーの実などである。ほとんど毎年雨季に水田は冠水してしまい，インドの中でも生産性の低い地方といわれる[2]。今報告をするマハーデーヴァ・プージャー

表1　N村のジャーティのおおまかな*)構成（1988年9月）

brāhmaṇ	約200軒	土地所有者。小・中学校の教師。
guār	約100軒	（乳搾り）土地所有者。Pañcāyat の長，郵便局長。
dusādh	約100軒	小作。
musalmān	約 50軒	小作。
mushar	約 50軒	くわで耕す仕事。小作。
mallāh	20～30軒	漁師。マカーン**)を煎って売る。
tatmā	約 25軒	小作。生のレンガ造り。
camār	約 20軒	（皮革職人）楽士，小作，竹製品製造。
baniyā	12軒	商売。
haluāi	6軒	菓子作り，ブージャー***)作り。
dhobī	5軒	洗濯。乳を売る。商売。
kamār	5軒	大工。
sūrī	5軒	商売。
dhānuk	4軒	水汲み。一人は指圧師 (khabās) の仕事。
nauā	2軒	散髪屋。（兄弟）
kumhār	2軒	土器職人。
telī	2軒	油搾り。現在は実際に搾らず，油の仲介者。
ḍōm	1軒	竹カゴ作り。
pāsī	1軒	ヤシ酒作り。ヤシの葉の細工作り。

*) 実際に調査した数ではなく，一人の知人に聞いた情報による。
**) マカーン makhān [GRIERSON 1885: 392: makhāna] はヒシのような池でとれる実。
***) ブージャー bhūjā [GRIERSON 1885: 353] は穀粒を煎ったものの総称。

1) ミティラー地方は現在のビハール州北部の以下の県 (District, Jilā) を含んでいる：Madhubani, Darbhanga, Samastipur, Vaisali, Muzaffarpur, Champaran, Monghyr, Saharsa, Purnea，そしてネパールの平原部の Janakpur 一帯も伝統的にミティラー地方に含まれる [MISHRA 1979: 13; JHA 1982: 32]。

2) A Social and Economic Atlas of India, 1987 Oxford University Press, p. 158, Table 72 によると，1981年から1986年のインドの米の平均生産量は 1,402 kg/ha であるが，ビハール州の平均生産量は 938 kg/ha で，この数値はこの表72に挙げられているインドの22州の中で，ナーガランドの 882 kg/ha に次いで低いもので，第一位のパンジャブ州の平均生産量 3090 kg/ha の3分の1以下である。

を見たJ村ではないが，比較的長期に滞在することになったダルバンガ県のN村のジャーティのおおまかな構成は表1のようで，このミティラー地方のほぼ平均的な姿を示しているのではないかと思われる。経済的には土地所有者であるバラモンとグアールが優位を示している。石井 [1988] はこのJ村の事例を例に，社会単位としての「世帯」や「家族」がこの地方で確定できにくいということを報告している。今報告するマハーデーヴァ・プージャーを行うのは家長とされる。その際，家長とは，核家族としての「世帯」の長なのか，「世帯」が集まった「家族」全体の長なのかという問題がある。原則的には，個々の「世帯」の長に，この儀礼を行う資格が与えられている。しかし，今，報告するように，2時間ほどの長さで丁寧に儀礼を行う例は，このJ村でもまれなことで，それを行うのは拡大家族全体の最年長者にあたる者である。

マハーデーヴァ・プージャーの概要

マハーデーヴァ・プージャーはヴェーダ期の家庭祭式文献 (gṛhyasūtra) に端を発する，一日のつなぎめの時間，つまり朝と夕方における礼拝 (saṃdhyā-upāsana)[3] と，ヴェーダ期以降に流布したであろうヒンドゥー的な神々の礼拝 (pūjā) が結合されたものである。この儀礼の名称マハーデーヴァ・プージャーは，全体の第二部をなす神々へのプージャーの中心になる神マハーデーヴァつまり，粘土で作られたリンガの形をしたシヴァ神へのプージャーに由来する。

第一部の saṃdhyā-upāsana はこのミティラー地方以外でも伝統的なバラモン達によって今日広く行われているようである。Vidyārṇava [1918] はベンガルおよびインド北部で行われている saṃdhyā-upāsana のいくつかの種類に関して伝えているし，Srinivasan [1973: 176–178] はマハーラーシュトラのバラモンの事例を報告している。また Dubois [1906: 251–269] は19世紀前半の南インドの例を紹介している[4]。ヴェーダ文献およびダルマ文献に基づく紹介としては上記の Srinivasan

3) 朝夕二回行われるという見解と，正午を加えて一日三回行われるという意見が伝統的にある [Kane 1974: 312]。しかし，今報告するJ村では一日一回，朝にのみ行われている。

4) これらの他に，今手元には英語で書かれた The Vedic Saṁdhyā. Our Prayer Book. Edited and Translated by Svami Satya Prakash Sarasvati, Allahabad: Dr. Ratna Kumari Svadhyaya Sansthana と，ヒンディー語とサンスクリット語の Pūjā-Karma-pradīpaḥ, Nitya naimittika kāmya karma sahitaḥ. Ācārya Śyāma Vihārī Tripāṭhī. Calcutta: Satyendra Prakasan, p. 13–34 の二つの普及本があるが，この種類の普及本はかなり出回っているのではないかと思われる。Tachikawa [1983: 185] は S. Citrav の Samdhyā 1977 Poona: Bharatiya Caritrakoś Mandala を挙げている。なお，ミティラー地方用のパンフレットに関しては387頁を参照されたい。

[1973] のほかに Kane [1974: 312–321], Gonda [1980: 460] などの研究がある[5)]。Kane [1974: 314] および Gonda [1980: 460] によると，saṃdhyā-upāsana は基本的に次の六つの要素からなる。つまり，口を水で濯ぐこと (ācamana)，調息，つまり呼吸を制御すること (prāṇāyāma)，身体を洗うこと (mārjana)，けがれをぬぐうこと (aghamarṣaṇa)，ガーヤトリーといわれるマントラを唱えること (gāyatrī-japa)，そして太陽の礼拝 (sūrya-upasthāna)。Srinivasan [1973] はヴェーダ文献ではじめてこの saṃdhyā-upāsana に言及する Taittirīya Āraṇyaka および Ṣaḍ-viṁśa Brāhmaṇa に伝えられている神話を分析して，saṃdhyā-upāsana の原型はガーヤトリーを唱えることと太陽の礼拝であるとした。この点に関しては最後のまとめで再び論じるつもりである。今報告するミティラー地方のマハーデーヴァ・プージャーの対応部分でもこの六つの要素は含まれているが，それ以外の大きな要素として，神々や祖霊に水を捧げることによって満足させること (tarpaṇa) が含まれている。ヴェーダ文献やダルマ文献によるこの saṃdhyā-upāsana に関する細かな規定に関してはこれらの研究書を参照していただきたい。そして，このマハーデーヴァ・プージャーに関しては下の式次第を見ていただきたい。

ヴェーダの伝統に従えば，この saṃdhyā-upāsana の後に，家長は agnihotra[6)] という朝・夕行うべき儀礼を行うことになる [Kane 1974: 675–689]。しかし，この伝統はプラーナ文献の時代になり，他の慣行に置き換えられていったようである。例えば，この朝の勤行に関する規定を伝えるプラーナの一つガルダ・プラーナは saṃdhyā-upāsana の規定の後，次のように教える，「それぞれのマントラによって神々を花，葉そして水を用いて敬うべし。ブラフマーを，シャンカラ（＝シヴァ）を，太陽を，そしてマドゥスーダナ（＝ヴィシュヌ）を。そして心を向けている他の神々を」[7)]。今報告するこの J 村の事例も，新しいプラーナ期の伝統に従って，saṃdhyā-upāsana の後に神々のプージャー[8)] をもってきている。その神々のプージャーの中

5) 今ここに挙げた Kane [1974: 312–321] はヴェーダの学習に専念する学生の守るべき生活規則の一環としてこの saṃdhyā-upāsana を紹介しているが，神々や祖霊に水を与えて満足させる儀礼 tarpaṇa に関しては，家長の生活規則を扱う第17章の終りの部分 [Kane 1974: 689–695] で論じている。他に Hillebrandt [1897: 53–54] はヴェーダの学生の義務として，一番素朴な形での朝の礼拝を紹介していて，Goudriaan [1970: 167–168] は南インドの Vaikhānasa Brāhmaṇa の寺院の僧侶の例に言及している。

6) agnihotra に関しては [Bodewitz 1976] を参照されたい。

7) Garuḍa Purāṇa 1, 50, 63–64a:

svair mantrair arcayed devān puṣpaiḥ patrais tathāmbubhiḥ /
brahmāṇam śakaraṃ sūryaṃ tathaiva madhusūdanam //63//
anyāṃś cābhimatān devān.

Viṣṇu Purāṇa 3, 11, 42 は神々のプージャーとアグニホートラの双方を行うべしという。

8) プージャー (pūjā) は現代のインドで普通に行われる神崇拝の方法である。その最も整備された形は「十六のおもてなし (upacāra) を伴うプージャー」ṣoḍaśa-upacārapūjā と言われるものである。そのプージャーの形式，および，プージャー一般に関して [Bühnemann 1988] および [Tachikawa 1983: 105–111] を参照されたい。

心が，粘土で作られたリンガの形のシヴァ神であるということは，ミティラー地方では一般に見られることのようである [MAITRA 1986: 59–60]。基本的にこの形によるプージャーを，J村以外でも，ダルバンガ市およびその近郊のN村で見ることができたし，また，広い意味でのミティラー文化圏に属するネパールのジャナプクル近郊の村でも，行われているのを確認することができた。ミティラー地方以外の事例を知らないので積極的には言えないが，saṃdhyā-upāsana という朝の礼拝はインドの他の地方でも行われているとしても，朝の勤行に，粘土で作られたリンガの形のシヴァ神へのプージャーが結び付いたこのマハーデーヴァ・プージャーはミティラー地方特有のものではないかと一人想像している。

マハーデーヴァ・プージャーの式次第

マハーデーヴァ・プージャーは基本的に以下の次第にのっとって行われる。外見上はめだつような行為に乏しく，ほとんどすべての行為が，着座した執行者のマントラの詠唱と，そのマントラに伴われた水などの供物の献上からなる。この儀礼においてマントラの果たす役割が極めて重要と思われるので，儀礼の次第の右にそれぞれの局面で唱えられるマントラの番号を明示した。本論の記述もマントラを中心に行われる。

I　準　備

II　朝の勤行 (saṃdhyā-upāsana)

1	身のきよめ	mantra 1- 3
2	調息 (prāṇāyāma)	4-10
3	身体を洗うこと (mārjana)	11-12
4	けがれをぬぐうこと (aghamarṣaṇa)	13-14
5	太陽の礼拝 (sūrya-upasthāna)	15-18
6	ガーヤトリーを唱えること (gāyatrī-japa)	19-24
a	女神としてのガーヤトリーの観想 (dhyāna)	19
b	おまねき (āvāhana)	20
c	礼拝 (upasthāna)	21-22
d	ムドラー (mudrā)	23
d	黙ってガーヤトリーを唱える (japa)	
e	おわかれ (visarjana)	24
7	満足させること (tarpaṇa)	25-33
a	神々のタルパナ	25

b　サナカ達のタルパナ　26
c　マリーチ達のタルパナ　27
d　祖霊一般のタルパナ　28
e　ヤマ達のタルパナ　29
f　先祖の霊のタルパナ　30
g　名もなき祖霊達のタルパナ　31-33
8　太陽への敬い水 (sūrya-arghya)　34
9　おゆるし　35-36
III　神々へのプージャー (pūjā)
1　準　備
2　太陽をはじめとする五人の神々へのプージャー (sūryādipañcadevatāḥ)　37
3　ヴィシュヌへのプージャー (viṣṇu)　38-41
a　原人の歌 (puruṣasūkta)　38
b　おそなえ　39-41
4　ナルマデーシュヴァラナータへのプージャー (narmadeśvaranātha)　42
5　ラクシュミーへのプージャー (lakṣmī)　43
6　サラスヴァティーへのプージャー (sarasvatī)　44
7　ドゥルガーへのプージャー (durgā)　45
8　ブヴァネーシュヴァリーへのプージャー (bhuvaneśvarī)　46
9　おゆるし　47
10　家の神々へのプージャー　48-51
a　ダクシナカーリーへのプージャー (dakṣiṇakālī)　48
b　シータラーへのプージャー (śītalā)　49
c　ヴィシャハリーへのプージャー (viṣaharī)　50
11　おゆるし　51
12　ハヌマーンへのプージャー (hanumān)　52
13　トゥルシーの木へのプージャー (tulasīvṛkṣa)　53
14　キールティムカへのプージャー (kīrtimukha)　54
15　シヴァへのプージャー (śiva/mahādeva)　55-59

a　おまねき (āvāhana)　55
b　観想 (dhyāna)　56
c　おそなえ　57
d　礼拝 (upasthāna)　58–59
16　ブラフマン神へのプージャー (brahman)　60
17　シヴァ，ヴァースデーヴァ，ゴーヴィンダへの頂礼 (śiva, vāsudeva, govinda)　61
18　おゆるし　62–63
19　プージャー終了の宣言　64–68
a　太陽をはじめとする五人の神々からキールティカムまで　64–66
b　シヴァへのプージャーの終了の宣言　67–68
20　チャンディーシュヴァラへの頂礼 (caṇḍīśvara)　69
21　祖霊達へのプージャーの終了の宣言　70
22　終了

記述方法と資料

本論でこのマハーデーヴァ・プージャーを，そこで用いられるマントラを中心に報告していくが，以下のような記述の形をとる。Ｉの準備はマントラとの対応が必ずしも本質的なものではないようなので，外見上どのような所作を執行者が行うかを，単に記述するだけである。IIの朝の勤行とIIIの神々へのプージャーの記述のところでは，左半分にそれぞれの局面で用いられるマントラの翻訳を示し，右半分で各々のマントラを唱えていかなる所作が行われているかを記述する。そしてローマ字に転写したマントラの原文とそれの主要な典拠は脚注の形で記述する。

なお，この報告の基礎資料は以下のものである。1987年12月17日と18日の，それぞれ午前10時半ごろからＪ村で L. K. Jha 氏の行った儀礼のカセットテープによる録音と，メモ，それに1988年９月２日の朝の同氏のマハーデーヴァ・プージャーの８ミリ・ビデオによる映像資料である。マントラに関しては1987年12月18日の録音テープを基礎とし，所作に関しては1988年９月２日のビデオ映像にのっとって記述を行った。また，祭具などのマイティリー語の名称などに関して，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の石井溥助教授に貴重な教示を頂いた。また基本的なマントラを録音テープからおこす場合に，この地方でのプージャーの次第を書いたいくつかのパ

ンフレットを参照した。それらは以下のものである。

1. Sadācārasāre. Vājasaneyikṛtyam. Paṇḍita Sureśa Miśra kṛta. Bābū Raghuvara Siṃha Bookseller, Madhubani.
2. Atha Āhnikakṛtyam: arthāt prātaḥ kṛtyādi vājasaneyināṃ Sadācārapaddhatiḥ. Paṇḍita Ciraṃjīva Śarmaṇā saṃkalitam. Kanhaiyālāla Kṛṣnadāsa, Laheriyāsarāy, Darbhanga 1976.
3. Maithila saṃpradāyānusāri saṃkṣipta sadācara śāstra (Āhnikakhaṇḍa) Sandhyāvandana vājasaneyī evaṃ chandoga ka dainika sadācāra. Mithilā Press, Darbhanga 1984.
4. Atha pramodāhnikam. Sadācārapaddhati. Paṇḍita Ciraṃjīva Śarma Maithila viracita mithilā-bhāṣārtha. Kanhaiyālāla Kṛṣṇadāsa, Laheriyāsarāy, Darbhanga.
5. Sacitra Sadācāra vājasaneyi kṛtyam. Dr. Ravīndra Nārāyaṇa Jhā. Mithilā pustak kendra, Darbhanga.

この5種類のパンフレットの中で L. K. Jha 氏が用いていたのは 1. のものである。本論でそれぞれのマントラを挙げるとき，L. K. Jha 氏の用いていたパンフレットの頁数と行数をマントラの番号の横に注記していく。なお，写真は一括して文末に提示するので，参照していただきたい。

本論　——Mahādevapūjā の記録——

I　準　　備

マハーデーヴァ・プージャーを行う前に L. K. Jha 氏は彼の家の井戸のところで歯を磨き，身体を洗い，今まで着ていたドーティーを洗い，新しいドーティーに着替える。その後，ローター[9]に井戸水を入れ，マハーデーヴァ・プージャーを行うベランダに向かう。ベランダの向かって左側に粘土で出来た穀物の貯蔵庫コーティーがあり，彼はそのコーティーの上に祭具一式を納めている。その祭具一式をコーティーの上からおろし，先ず始めにワラの小さなゴザを敷き，その上に小さな布を敷いて座（アーサナ）を作る。次に家の中に保存しているビンにはいったガンジス川の水を少

9) loṭā. この容器は普通真鍮製で，日常生活において，水を汲んだり飲んだりする際に広く用いられている [Grierson 1885: 131, no. 687]。それが今，プージャーの道具として用いられていて，プージャーの道具としては jalpātar の名称をもつ [Grierson 1885: 156, no. 775]。

し，ローターの中に入れる。ビンを再び家の中に持っていった後，先程準備した座の上に東面して，あぐらをかいて座る。この間，ベランダの向かって右の端では彼の妻が粘土で，キールティムカの像一つと，十一個のシヴァのリンガの像を作っている（写真1）。

さじのはいった小さな銅の容器[10]から両手に水をかけ，両手をていねいに洗う。ゴーピーチャンダナ (gopīcandana) という白い土のかたまりを右手にとり，左手に水を少し入れ，その土を溶き，小さい皿に移す[11]。右手にカガミをとり，三回右回りに頭のところで回す。その白い土を少量右手の親指と人差指ではじいて，地面に捨てる。その後，以下の順序で身体に白い土を塗っていく。先ず始めに額に上向きに線を引く[12]。ついで右目のところ，額に上向きの線，左目，鼻のつけね，右耳のつけね，左耳のつけね，右の首の側面，左の首の側面，下から上の方向で左の上腕，左の肘のところ，右の上腕，右の肘のところ，そして，乳と首の間の胸のところに左から右向きに太めの線を引き，最後に乳の間のところに丸くビャクダンを塗る（図1）。

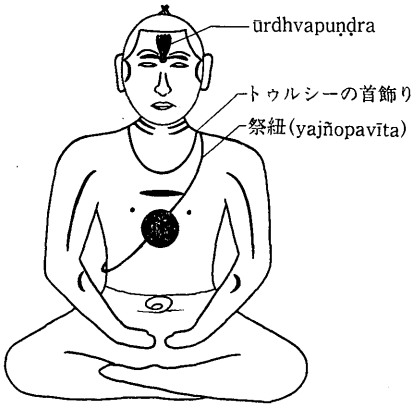

図1　ゴーピーチャンダナを身体に塗る。

次にビャクダンすり器[13]を前に置き，ビャクダンの木片を手にして，時計回りに回すようにしてビャクダンをすり始める（写真2）。この時，粘土の像が出来

10) この Mahādevapūjā をはじめとするさまざまなプージャーで用いられるこのさじは argha と呼ばれ，この小さな銅の容器は pañcpātar と呼ばれる [Grierson 1885: 156, no. 775]。

11) この皿は直径 5 cm ぐらいのもので，このようにゴーピーチャンダンを入れたり，この儀礼の過程ではさらに，すったビャクダンなどを入れるのに用いられる。この皿よりひとまわり大きな，直径 10 cm ほどの皿も用いられる。そしてこの二種類の皿はともに sarāy と呼ばれている [Grierson 1885: 156, no. 775]。本論のマハーデーヴァ・プージャーの記録のところで，後者の皿を「銅の小皿」と表記する。

12) 額の上の上向きの線は特に ūrdhvapuṇḍra と呼ばれる。この ūrdhvapuṇḍra をはじめとする身体のさまざまな部位の印に関して [Kane 1974: 672–673] を参照せよ。神々のプージャーの始まる前の準備の時に，今度は灰を用いて身体の各部位に同じように印を付ける。その所作に関しては413頁および注83を参照されたい。

13) このビャクダンすり器は candanrautā [Grierson 1885: 156, no. 778] と呼ばれている。直径約 15 cm ほどの石製の丸い板である。日常生活で香料をすりつぶす時に用いられる石の板とは別の物である。この香料すり板は silauṭ と呼ばれ，すりつぶす時に用いる石の棒は loḍhi と呼ばれている [Grierson 1885: 121, no. 626, 627]。

上り，木の板[14]にのせて彼の妻が持ってきて，座の前の方に置く。すり終えたビャクダンを小さい皿に移し，次に赤いビャクダンの木片を手にして，同様に時計回りに回すようにして赤いビャクダンをする。すり終えるとその赤いビャクダンもまた小さい皿に移す。

さじのはいった小さな銅の容器の水でていねいに両手を洗う時から，彼は小声でマントラを唱え始めた。しかし，この時のマントラは，見せてもらった四回の彼のマハーデーヴァ・プージャー毎に少しずつ変わっている。したがって，この段階では行為とマントラがセットになって伝えられていないと判断し，行為のみを再現した。

II　朝の勤行 (saṃdhyā-upāsana)

II-1　身のきよめ

第一のマントラ

「オーム。けがれていても，清くとも，またどのような状態にあろうとも，蓮の目をした神（ヴィシュヌ）を想起する者は，外も内も清らかである。」[15]

「オーム。蓮の目をした神は清めよ。」[16]

さじで右の掌に水を少し入れ，頭から胸にかけてその水をかける。

右手を右の側頭にあて，黙って瞑想する（約13秒）。

左手のさじから右の掌に水を入れ，飲む。

左手のさじから右の掌に水を入れ，二回前に置いたボウルにすてる。

---

14) この板は pīḍhī [Grierson 1885: 122, no. 634] と呼ばれる。日常生活ではすわり板として用いられている物が，今の場合利用されている。

15) oṃ apavitraḥ pavitro vā sarvāvasthāṃ gato 'pi vā /
yaḥ smaret puṇḍarīkākṣaṃ sa bāhyābhyantaraḥ śuciḥ //
このマントラの出典をヴェーダ文献，ダルマ文献，プラーナ文献等に見つけることはできなかった。しかしこの Mahādevapūjā に組み込まれている saṃdhyā-upāsana の記録を残している Dubois [1906: 251] は以下のような文面でこのマントラを伝えている：
Apavitraha pavitrova sarva vastam,
Gatopiva yassmaret pundareekaksham,
Sabahiabhiantara suchihy.
[Jha 1983: 379] にすべてのプージャーに適用される一般的規則 (sarvapūjopayogī sāmānya-vidhi) の第一項，身のきよめ (ātmaśuddhi) のためのマントラとしてこれが挙げられている。

16) oṃ puṇḍarīkākṣaḥ punātu // このマントラの出典も見付けることができなかった。なお「蓮の目をした者」はヴィシュヌである。

第二のマントラ[17](p. 6, 1.6–13)

汚れをぬぐいとる賛歌 (aghamarṣaṇa-sūkta) の作者はアガマルシャナ，韻律はアヌシュトゥブ[18]，神格は創造の出来事，馬の供犠祭[19]の最後の沐浴[20]の際に用いる。

左手のさじから右の掌に水を入れ，ひざの前に保持し，その後もう一回水を入れる。

「オーム。天則は，真実は，かきたてられた熱力より生じた。それより，夜は生

（マントラを唱え始める。）

17) この第二のマントラから第二十一のマントラまで，途中第三，七，十九のマントラを除いてすべてのマントラの冒頭で，それぞれのマントラの作者 (ṛṣi)，韻律 (chandas)，神格 (devatā)，そして用いられる場合 (viniyoga) が言及されている。ヴェーダ文献の補遺文献として目録文献 (anukramaṇī) というものがあり，それらはヴェーダ文献に伝承されている賛歌の一々にこれらのことに関する情報を提供している [Winternitz 1908: 243; Bhat 1987: 14]。その目録文献のうちの一つ Kātyāyana 作の Sarvānukramaṇi の冒頭に，個々のマントラに関してこのような事柄に関する知識がなければ儀礼は成功しないと教えられている (atha ṛgvedāmnāye śākalake sūktapratīkarksaṅkhyarṣidaivatacchandāṃsy anukramiṣyāmo yathopadeśam / na hy etajjñānam ṛte śrautasmārtakarmaprasiddhiḥ //「さてシャーカラ派のリグヴェーダの伝承に基づいて個々の賛歌 (sūkta) の冒頭の詩句，詩節 (ṛc) の数，作者，神格，韻律に関して，教えられているように順に説明していこう。何故なら，この知識がないとシュラウタとスマールタの儀礼は成功しないから」)。ヴェーダ期の儀礼の時から各マントラに関して作者等の知識が，そのマントラを使用する際に必要であるという意識があった。その意識が現在まで保存されている。

Kane [1968: 450] は中世の特異なダルマ文献の一つ Bṛhad Yogiyājnāvalkya の教える所として，マントラを唱える際に知っておく必要のある五つの事項，作者，韻律，神格，用い方，そしてそのマントラの解釈 (brāhmaṇa) を列挙している。

しかし，これらの事項に関する知識は，それぞれのマントラを習得する際に必要事項として伝授されても，推測するに，儀礼執行時にマントラを唱えるのに際しては唱える必要がなかったのではないか。しかし，今記録を伝えている L.K. Jha 氏は実際この部分もマントラとして唱えているし，また現在 Sadācāra, Āhnikakṛtya, Saṃdhyāvandanā などの名前で出版されている日々の勤行に関するパンフレットでも，この部分は本来のマントラと同様に外見上は扱われていて，それらを用いる場合はやはりマントラとしてこの部分を唱えるのであろう。しかし，このマントラの作者などを教える部分はいずれにしても本来のマントラでないので，以下の注においてテキストは注記しないことにする。

18) anuṣṭubh. 音節数が 8×2+8×2 の韻律。

19) aśvamedha (*cf.* [Hillebrandt 1897: 152]).

20) avabhṛtha [*cf.* Hillebrandt 1897: 152]. しかし，ヴェーダ期の Aśvamedhaの avabhṛtha でこのマントラが使われた証拠はないように思える。このマントラは注21にあるように Ṛgveda 10, 190 に伝えられているが，このマントラを伝える次に古い文献 Taittirīya Āraṇyaka 10, 1 [704, 9] では注釈者 Sāyaṇa によると，沐浴の後の調息の際に用いられるとされる (jale nimagnasya prāṇāyāmārtham aghamarṣaṇasūktam āha「水にもぐってでてきた者が調息をするためにアガマルシャナの賛歌を伝える」)。マヌの法典11, 260では次のように言って，このアガマルシャナの賛歌とアシュヴァメーダを比喩として結びつけている：

yathāśvamedhaḥ kraturāṭ sarvapāpāpanodanaḥ /
tathāghamarṣaṇaṃ sūktaṃ sarvapāpāpanodanam //

「丁度祭式の王アシュヴァメーダがすべての罪を取り除くように，アガマルシャナの賛歌はすべての罪を取り除く」。*Cf.* Mahābhārata 12, 148, 26. したがって，このマントラと，Aśvamedha 祭の最後の沐浴との関係は間接的であるように思える。

まれた。それより，波打つ大海は。」
「波打つ大海より一年が生まれた。昼と夜とを，まばたきする一切のものを支配する者は造る。」
「太陽と月とを創造者は以前のように整えた。天と地と虚空と，そして太陽を。スヴァーハー。」[21)]

マントラを唱え終えて，水をボウルにすてる。左手のさじから右の掌に水を入れ，もう一度水をボウルにすてる。同じようにして右の掌に入れた水を一回飲む。同じく右の掌に入れた水をボウルにすてる。

第三のマントラ (p. 6, l.15)

「オーム。水は私を守れ。」[22)]

右の掌に水を入れて，頭のまわりにまく。

II-2　調息 (prāṇāyāma)

第四のマントラ (p. 6, l.17–18)

オームの音の作者はブラフマン，韻律はガーヤトリー[23)]，神格はアグニ，色は白，すべての祭式の始めに用いる。

顔の前で両手を蕾状に合わせて，マントラを唱え始める。

第五のマントラ (p. 6, l.19–p. 7, l.1)

---

21) oṃ ṛtáṃ ca satyáṃ cābhī́ddhāt tápasó 'dhy ajāyata /
táto rā́try ajāyata tátaḥ samudró arṇaváḥ //1//
samudrā́d arṇavā́d ádhi saṃvatsaró ajāyata /
ahorātrā́ṇi vidádhad víśvasya miṣató vaśī́ //2//
sūryācandramásau dhātā́ yathāpūrvám akalpayat /
dívaṃ ca pṛthivī́ṃ cāntárikṣam átho svàḥ //3//
このマントラは Rgveda 10, 190 の全文である。以後ヴェーダ文献を引用する場合，原則として最も古い文献の出典個所に言及する。広汎なヴェーダ文献におけるその他の出典個所に関しては [Bloomfield 1906] を参照されたい。

22) oṃ āpo mām abhirakṣantu //
このマントラの出典は不明。

23) gāyatrī. 音節数が 8×2+8 の韻律。このようにガーヤトリーは24個の音節を持つ一つの詩形であり，一方オーム oṃ という音はただ一つの音節からなっていて，このオームの韻律がガーヤトリーであるという言明は奇妙に思える。聖なる音オームに関して，今までの主としてヴェーダ文献に基づく研究史をまとめ，あらたな語源解釈の提案している [Parpola 1981] を参照されたい。

七つのヴィヤーフリティ[24]の作者はプラジャーパティ[25]，韻律はガーヤトリー，ウシュニフ[26]，アヌシュトゥブ，ブリハティー[27]，パンクティ[28]，トゥリシュトゥブ[29]，ジャガティ[30][31]，神格はアグニ，ヴァーユ，アーディティヤ，ブリハスパティ，ヴァルナ，インドラ，一切神[32]，特に指定されない贖罪儀礼[33]の調息の

24) vyāhṛti. この vyāhṛti はヴェーダの祭式儀礼に用いられる定形句で，普通 bhūr bhuvaḥ svaḥ の三つの語からなる [Krick 1982: 393–396; Gonda 1980: 226]。これら三つの語は伝統的には「大地，虚空，天」を指すものとして解釈されているが，本来の意味に関していくつかの意見がある [Mayrhofer 1963: 510–511]。今ここで話題になっているのはこの三つの vyāhṛti でなく，七つの vyāhṛti である。それは bhūr bhuvaḥ svaḥ の他に mahaḥ, janaḥ, tapaḥ, satyam の四つの語が組み合わされて作られる [Weber 1865: 108]。この七つの語が一つの組として登場する最初のヴェーダ文献は Taittirīya Āraṇyaka 10, 27 (743, 25–26) であろう。oṃ bhūḥ / oṃ bhuvaḥ / oṃ suvaḥ / oṃ mahaḥ / oṃ janaḥ / oṃ tapaḥ / oṃ satyam /. 注釈者 Sāyaṇa によると，Taittirīya Āraṇyaka のこの個所では今まさに話題になっている調息 (prāṇāyāma) の場面で，ガーヤトリーといわれるマントラの前で唱えるべきものとして性格付けられている (gāyatryā āvāhanād ūrdhvaṃ prāṇāyāmārthaṃ mantram āha (743, 24)「ガーヤトリーをお招きした後で，調息のためのマントラを説く」)。そして，この伝統は中世の儀礼文献を通じて今日にまで生き続けることとなる [Kane 1974: 317; Dreyer 1986: 37]。

25) Prajāpati が vyāhṛti の作者であるということは11世紀にカシミールで生きていた Devapāla [Dreyer 1986: XXX] の Sandhyopāsanamantrabhāṣya [Dreyer 1986: 39] も伝えている：vyāhṛtīnāṃ tu sarvāsām ṛṣir ādyaḥ prajāpatiḥ「すべてのヴィヤーフリティの作者は最初のプラジャーパティである」。

26) uṣṇih. 音節数が8×2+12の韻律。

27) bṛhatī. 音節数が8×2+12+8の韻律。

28) paṅkti. 音節数が8×2+8×2+8の韻律。

29) triṣṭubh. 音節数が11×2+11×2の韻律。

30) jagatī. 音節数が12×2+12×2の韻律。

31) 注24で提示したように七つの vyāhṛti の実際は，その都度唱えられる oṃ を勘定に入れても，20音節しかもたない，しかも韻律の形をとっていない定形句である。注23で言及したように，ただ一音節からなる oṃ の音に関して，その韻律は gāyatrī とみなした考え方と同一の表現である。この発言が文献的にどこまでたどれるかは，今のところ私にはわからない。

32) 注25で紹介した Devapāla は vyāhṛti の神格に関して二つの説を紹介している [Dreyer 1986: 39]:

agnir vāyū raviś caiva vākpatir varuṇas tathā /
indro viśve vyāhṛtīnāṃ daivatāni yathākramam //
agniḥ somas tathā sūryo vākpatir varuṇas tathā /
kvacid indras tathādityo vyāhṛtīnāṃ yathākramam //

「アグニ，ヴァーユ，太陽 (=アーディトゥヤ)，そして言葉の主 (=ブリハスパティ)，さらにヴァルナ，インドラ，一切（神）がこの順序でヴィヤーフリティの神格である。」「アグニ，ソーマ，さらに太陽，言葉の主，さらにヴァルナ，ときにはインドラ，さらにアーディトゥヤがこの順序でヴィヤーフリティのもの」。Devapāla の紹介する二つの説の内，第一のものが今の場合と対応している。

33) [Kane 1973: 121] を参照。

際に用いる。

第六のマントラ (p. 7, 1.2–3)

ガーヤトリー[34]の作者はヴィシュヴァーミトラ，韻律はガーヤトリー，神格はサヴィトリ，入学式の時の調息の際に用いる[35]。

ここまで唱えて，両手を合わせ，頂礼し，二回手をたたく。一回右手を頭の回りにまわす。その後，次のようにして調息を行う。まず親指で右の鼻の穴をおさえる（約30秒）（写真３）。ついで，中指と薬指で両方の鼻の穴をおさえる（約30秒）。最後に親指をはずして，左の鼻の穴をおさえる（約16秒）[36]。調息が終わると，水で右手を洗う。

第七のマントラ (p. 7, 1.19–20)

「オーム。水は光輝，精髄，不死，ブラフマン。ブール，ブヴァル，スヴァル。オーム。」[37]

34) gāyatrī. この gāyatrī は注23でいった韻律としてのガーヤトリーではなく，この韻律で作られた一つの例である。実際は Ṛgveda 3, 62, 10 に伝えられているマントラで，sāvitrī の名前でも知られている [Kane 1974: 300–304; Gonda 1975: 51–52]。そのテキストは以下のごとし：

tát savitúr váreṇyaṃ bhárgo devásya dhīmahi /
dhíyo yó naḥ pracodáyāt //

「神サヴィトリのかのすぐれたる光輝を我々は受けん，彼は我々の思考を駆り立てるべし。」

35) [Kane 1974: 317].

36) この所作が L. K. Jha 氏の行う調息である。この間，彼は心の中で注24で述べた，一々に oṃ を伴う七つの vyāhṛti と，注34で述べた gāyatrī を唱えている。この方法は Kane [1974: 317] に紹介されている Bṛhadyogiyājñavalkya の説く方法と一致する。なお，Kane [1968: 450] によると，この Bṛhadyogiyājñavalkya という Dharma のテキストは Mithilā 地方に滞在していた Yogīśvara に聖仙達が教えを請うという形をとっており，今報告しているこの方法が Mithilā 地方の伝統的なものであることを推測させる。調息はこのように三つの段階からなる。先ず，右の鼻の穴を押えている時，左の鼻の穴から空気を吸い込んでいる。これを pūraka（満たすこと）という。次に，完全に空気の動きを止める。これは kumbha または kumbhaka（第一義は壺，つまり壺のように肺の中に空気を貯めること）といわれる。そして，最後に左の鼻の穴を押え，右の鼻の穴から空気を吐き出す (recaka 空にすること) [Kane 1974: 317; Vidyārṇava 1918: 43–44]。

37) óṃ āpo jyótī ráso 'mṛtam bráhma bhūr bhúvaḥ súvar óṃ.

Taittirīya Āraṇyaka 10,27 (744,2). āpo から suvar までの部分は gāyatrī マントラの頭 śiras と呼ばれているもの (Sāyaṇa のこのマントラに対する注釈：āpo jyotir ityādiko gāyatryāḥ śiromantraḥ tasyādyantayoḥ praṇavadvayaṃ pūrvavad uccāryate (744, 10–11)「『水は，光輝』と始まる部分はガーヤトリーの頭のマントラ。それの最初と最後に二回『オーム』と，以前のように唱える」)。

II-3　口濯ぎ (ācamana)

第八のマントラ (p. 8, 1.1–7)

さじで一回水を飲む。さじで一回水をすてる。

「太陽は私を」というマントラの作者はブラフマン，韻律はプラクリティ[38]，神格はスールヤ，朝の口濯ぎの際に用いる。

さじを左手に持ちかえ，右手に水を入れ，掌を上にして右腕を右ひざの上に置く（写真4）。

「太陽は私を，怒りは，怒りの主達は，怒りのゆえに犯した罪より守れ。夜に私が，心によって，言葉によって，両の手によって，両の足によって，腹によって，性器によって犯した罪，それを夜は帳消にせよ。私の中にあるどんな悪行をも，今，私は私を，不死を母体とする太陽の中に，光輝の中に献じる。スヴァーハー。」[39]

と，朝の口濯ぎの際に。

「スヴァーハー」と唱えて，水をボウルにすてる。左手に水を入れ，飲む。さらに一回水をボウルにすてる。くちびるを洗う。

第九のマントラ (p. 8, 1.9–14)

「水は清めよ」というマントラの作者はヴィシュヌ，韻律はアヌシュトゥブ，神格は水，昼の口濯ぎの際に用いる。

水を右手に入れ，一回すてる。掌を上にして右腕を右ひざの上に置く。

38) prakṛti. 音節数が84の韻律 [Weber 1863: 132, 137, 400]。

39) oṃ sūryaś ca mā manyuś ca manyupatayaś ca manyukṛtebhyaḥ / pāpebhyo rakṣantām / yad rātriyā pāpam akārṣam / manasā vācā hastābhyām / padbhyām udareṇa śiśnā / rātris tad avalumpatu / yat kiṃ ca duritam mayi / idam ahaṃ mām amṛtayonau / sūrye jyotiṣi juhomi svāhā //

Taittiriya Āraṇyaka 10, 25 (742, 15–19). 注38で prakṛti の韻律の音節数は84と述べたが，このテキストの音節数はそれと一致しない。冒頭の oṃ をいれると，音節数は86，それを除くと85，そして最後の svāhā を計算にいれないと83という数を示す。Sāyaṇa の注釈によると，このマントラは朝，水を飲む際に用いられるという：prātaḥsaṃdhyākāle jalapānārthaṃ mantram āha (742, 14)「朝のつなぎの時，水を飲むためのマントラを説く」。

「水は清めよ，大地を。大地は清められて，清めよ，私を。清めよ，（水と）ブラフマナスパティは。ブラフマンに清められた（大地）は私を清めよ。」
「残ったものを，享受すべきでないものを，または私の悪しき行ないを，私のすべてを清めよ，水は。そして良くない人々から受け取ったものを。スヴァーハー。」[40]
と，昼に。

「スヴァーハー」と唱えて，水を一回右手に入れ，ボウルにすてる。右手に水を入れ，飲む。一回すてる。くちびるを洗う。

第十のマントラ (p. 8, 1.16–p. 9, 1.3)
「アグニは私を」というマントラの作者はルドラ，韻律はプラクリティ，神格はアグニ，夕べの口濯ぎの際に用いる。
「アグニは私を，怒りは，怒りの主達は，怒りのゆえに犯した罪より守れ。昼に私が，心によって，言葉によって，両の手

水を右手に入れ，一回すてる。掌を上にして右腕を右ひざの上に置く。

40) ā́paḥ punantu pṛthivī́ṃ pṛthivī́ pūtā́ punātu mā́m /
punántu bráhmaṇaspátir bráhmapūtā punātu mā́m //
yád úcchiṣṭam ábhojyaṃ yád vā duścáritaṃ máma /
sárvaṃ punantu mā́m ápo 'satā́ṃ ca pratigráham // svā́hā //
Taittiriya Āraṇyaka 10, 23 (740, 23–741, 1). Sāyaṇa の注釈によると，このマントラは昼，水を飲むときに用いられる：mādhyāhnikasaṃdhyānusthāne 'bhimantritajalapānārthaṃ mantram āha (740, 22)「昼のつなぎの時の（儀礼を）行う際に，マントラを唱えられた水を飲むためのマントラを説く」。今，報告しているマハーデーヴァ・プージャーは朝に行われた。その朝のためのマントラは，上記の第八のマントラである。注釈者サーヤナは，しかし，このマントラは昼に用いることを教えている。さらに，次に続く第十のマントラの使用時は，viniyoga によっても，またサーヤナの説によっても，夕方であるとされる。なお，この Saṃdhyopāsana をかなり詳しく記述するプラーナ文献の一つナーラダ・プラーナも，これら三つのマントラをそれぞれ朝，昼，夕に配している：dvir ācāmet tataḥ paścāt prātaḥ sūryaś ca meti / āpaḥ punantu madhyāhne sāyam agniś ca meti ca // (Nārada Purāṇa 1, 27, 48)「その後，二回ずつ（水で）口を濯ぐべし。朝には『太陽は私を』と（唱えて），『水は清めよ』は昼に，そして，夕べには『アグニは私を』と」。さらに [Vidyārṇava 1918: 45, 67, 72] を参照。本来は朝，昼，夕と三つに分けられて，唱えられていたマントラを，今，執行者は，一度に，朝に唱えていることになる。

によって，両の足によって，腹によって，性器によって犯した罪を，それを昼は帳消しにせよ。私の中にあるどんな悪行をも，今，私は私を不死を母体とする真実の中に，光輝の中に献じる。スヴァーハー。」[41)]

「スヴァーハー」と唱えて，水を一回右手に入れ，ボウルにすてる。右手に水を入れ，飲む。一回すてる。くちびるを洗う。

II-3　身体を洗うこと (mārjana)

第十一のマントラ (p. 9, l. 6–15)

「汝ら水はじつに」に始まる三つの詩節の作者はシンドゥドゥヴィーパ，韻律はガーヤトリー，神格は水，洗う際に用いる。

右手のさじで左手に水を入れ，さじを置き，右手を左手に重ねる。

「オーム。汝ら水はじつに元気づけるものなり。オーム。そのような汝らは我々を滋養へと置け。オーム。大いなる喜びを見るために。オーム。汝らの最も優しいエッセンス。オーム。それを我々にここで分け与えよ。オーム。快く母親達がするように。オーム。その者のために我々は汝らへと行こう。

オームと唱える毎に，親指と人差指で水をつかみ，顔から頭にその水をかける。同じ動作を七回繰り返す。

オーム。その者の家へと汝らは駆り立て。オーム。我々を生まれさせた者のために，

この部分を唱えて水を前のボウルにすてる。

41) oṃ agniś ca mā manyuś ca manyupatayaś ca manyukṛtebhyaḥ / pāpebhyo rakṣantām / yad ahnā pāpam akārṣam / manasā vācā hastābhyām / padbhyām udareṇa śiśnā / ahas tad avalumpatu / yat kiṃ ca duritaṃ mayi / idam ahaṃ mām amṛtayonau / satye jyotiṣi juhomi svāhā //

Taittirīya Āraṇyaka 10, 24 (741, 17–21). Sāyaṇa によると，夕べに水を飲む時に使うという：sāyaṃsaṃdhyākāle jalapānārthaṃ mantram āha「夕方のつなぎの時に水を飲むためのマントラを説く」。注32を参照されたい。

水よ。」[42]

最後に，再び顔から頭に水をかける。

第十二のマントラ (p. 9, 1.18–p. 10, 1.1)

「木の柱から」というマントラの作者は王子コーキラ，韻律はアヌシュトゥブ，神格は水，サウトラーマニー祭の最後の沐浴の祭に用いる[43]。

右手のさじで左手に水を入れ，さじを置き，右手を左手に重ねる。

「木の柱から解き放たれる者のように，汗をかいて，沐浴しよごれから（放たれる者の）ように，清めの道具で清められた溶けたバターのように，水は私を罪より清めよ。」[44]

右手の指全部で水をつかみ，「ように」と唱える毎に，三回，前のボウルに水をすて，最後の部分を唱えて，左手の残りの水を右手に移し，頭にかける。

II-4　けがれをぬぐうこと (aghamarṣaṇa)

第十三のマントラ[45] (*cf.* p. 10, 1.4)

「オーム。汚れをぬぐいとる賛歌(aghamarṣaṇasūkta) の作者はアガマルシャナ，韻律はアヌシュトゥブ，神格は創造の出来事，馬の供犠祭の最後の沐浴の際に用いる。

「オーム。天則は，真実は，かきたてられた熱力より生じた。それより，夜は生

黙って，左手のさじで右手に水を入れる。オームと唱えて，水のはいっている右手を広げて顔の前にもっていき，そのままの姿勢でマントラを唱える。

---

42) oṃ ápo hí ṣṭhā́ mayobhúvaḥ, oṃ tā́ na ūrjé dadhātana /
oṃ mahé ráṇāya cákṣase //
oṃ yó vaḥ śivátamo rásaḥ, oṃ tásya bhājayatehá naḥ /
oṃ uśatī́r iva mātáraḥ //
oṃ tásmā áraṃ gamāma vaḥ, oṃ yásya kṣáyāya jínvatha /
oṃ ápo janáyathā ca naḥ //

Rgveda 10, 9, 1–3. リグヴェーダのテキストとしては，すべて oṃ の部分は含まれていない。身体を洗う際に用いるマントラであるということに関しては [Kane 1974: 317] および，[Vidyārṇava 1918: 46–50] を参照。

43) このマントラは viniyoga が言うように，事実，ヴェーダ祭式の一つの Sautrāmaṇī [Hillebrandt 1897: 159–161] において用いられている [Caland 1928: 181–182]。

44) oṃ drupadā́d iva mumucānáḥ svinnáḥ snātó málād iva /
pūtáṃ pavítreṇevā́jyam ápaḥ śundhantu maínasaḥ //

Atharvaveda 6, 115, 3 ([Caland 1910: 88] を参照) は第二 pāda の snātó を snātvā́ に読む。このマントラと同じ読みは Vājasaneyi Saṃhitā 20, 20 が伝える。このマントラが「身体を洗う」際に用いるということに関しては Vidyārṇava 1918: 46, 101 および Skanda Purāṇa 4, 1, 35, 106, Garuḍa Purāṇa 1, 50, 46cd, Nārada Purāṇa 1, 27, 50ab を参照されたい。

45) これは第二のマントラと同じ。390頁，および注21を見よ。

まれた。それより，波打つ大海は。」
「波打つ大海より一年が生まれた。昼と夜とを，まばたきする一切のものを支配する者は造る。」
「太陽と月とを創造者は以前のように整えた。天と地と虚空と，そして太陽を。スヴァーハー。」

スヴァーハーと唱えて，水をボウルにすてる。

第十四のマントラ (p. 10, 1.7–11)

「汝は中で動く」というマントラの作者はチラシュチーナ，韻律はアヌシュトゥブ，神格は水，水に触れる際に用いる。
「オーム。存在物の中で，ほら穴の中で，汝はあらゆる方向を向いて動く。汝は祭式，汝はヴァシャットという掛声。水は光，精髄，不死。ブール，ブヴァハ，スヴァル，オーム。」[46)]

左手のさじで右手に二回水をかける。右手を右膝に置き，マントラを唱える。

左手のさじで右手に水を入れ，オームと唱え終えて，水を飲む。

II-5　太陽の礼拝 (sūrya-upasthāna)

第十五のマントラ (p. 10, 1.16–19)

「オーム。我々は」というマントラの作者はヒラニャストゥーパ，韻律はアヌシュトゥブ，神格は太陽，太陽を礼拝する際に用いる。

オームと一声唱えて，空を見上げ，両手で持ったさじの柄の方から一回ボウルに水をすてる。

46) oṃ antaś carasi bhūteṣu guhāyāṃ viśvatomukhaḥ /
tvaṃ yajñas tvaṃ vaṣaṭkāra āpo jyotī raso 'mṛtam //
bhūr bhuvaḥ svaḥ //
Śaṅkha Saṃhitā 9, 16 (356, 10–11). このテキストと少し異なるテキストを Taittirīya Āraṇyaka 10, 31 (745, 10–12) が伝えている。さらに [Varenne 1960, tome second: 104] を参照されたい。なお，このテキストの中で āpo jyotī 以下の部分はガーヤトリー・マントラの頭といわれるものである。注37を参照。

「オーム，我々は闇のかなたより，最高の光輝を見つつ，神々の中の神，太陽に至った，最高の光輝に。」[47]

第十六のマントラ (p. 10, l.19–p. 11, l.2)

「そして，かの」というマントラの作者はプラスカンヴァ，韻律はガーヤトリー，神格は太陽，太陽を礼拝する際に用いる。

「そして，かのジャータヴェーダスを光線は上へ運ぶ，すべての者が太陽を見るように。」[48]

両手の掌を前に向け，その後，両耳の横にかざす。そして，顔の前で両手をVの字型に広げて，マントラを唱える。

第十七のマントラ (p. 11, l.2–6)

「輝く」というマントラの作者はカウトゥサ，韻律はトリシュトゥブ，神格は太陽，太陽を礼拝する際に用いる。

「輝く，神々の顔は昇った，ミトラの，ヴァルナの，アグニの目は。天地を，虚空を満たした。太陽は動くものの，止まっているもののアートマン。」[49]

と，唱えて，両手を蕾の形に合わせて礼拝。

第十八のマントラ (p. 11, l.6–11)

「かの目が」というマトンラの作者はアタルヴァンの息子ダディアンチュ，韻律は音節の増えたプラウシュニフ[50]，神格は太陽，太陽を礼拝する際に用いる。

「オーム。かの目が，神々によって置かれ，東の方で白く昇るのを，我々は百年

47) oṃ úd vayáṃ támasas pári jyótiḥ páśyanta úttaram /
deváṃ devatrā́ sū́ryam áganma jyótir uttamám //
Ṛgveda 1, 50, 10. [Kane 1974: 318] を参照。

48) oṃ úd u tyáṃ jātávedasaṃ deváṃ vahanti ketávaḥ /
dṛ́śé víśvāya sū́ryam //
Ṛgveda 1, 50, 1. [Kane 1974: 318] を参照。

49) oṃ citráṃ devā́nām úd agād ánīkaṃ cákṣur mitrásya váruṇasyāgnéḥ /
ā́prā dyā́vāpṛthivī́ antárikṣaṃ sū́rya ātmā́ jágatas tasthúṣaś ca //
Ṛgveda 1, 115, 1. [Kane 1974: 318] を参照。

50) 注51を見よ。

見たい。百年生きたい。百年聞きたい。
百年語りたい。百年弱くなりたくない。
そして百年以上も。オーム。」[51]

オームと唱え終えて，右手の指を軽く合わせ，乳の間，額，後頭部，左肩，右肩に触れ，人差指と中指で両眼に触れ，軽く手をたたき，最後に唇に手を軽くあてる。この動作を三回繰り返す。

II-6　ガーヤトリーを唱えること (gāyatrī-japa)

II-6-a 女神としてのガーヤトリーの観想 (dhyāna)

第十九のマントラ (p. 12, 1.6–9)

「オーム。白い色で，名を告げられて，絹の衣服をまとい，白い化粧と花と飾りで飾られて，太陽の円盤の中に立ち，ブラフマンの世界に達し，珠数をかけている女神，蓮の座に座る清らかな者。」[52]

軽く合わせた両手を足の上にのせて，十九から二十一のマントラを唱える。

II-6-b おまねき (āvāhana)

第二十のマントラ (p. 12, 1.11–14)

「オーム。汝は威力」というマントラの

---

51) oṃ tác cákṣur devâhitaṃ śukrám uccárat /
　　páśyema śarádaḥ śatáṃ jívema śarádaḥ śatám //
　　śṛnuyāma śaradaḥ śataṃ prabravāma śaradaḥ śatam
　　adīnāḥ syāma śaradaḥ śatas bhūyaś ca śaradaḥ śatāt //oṃ//
　このマントラの内，二行目までは Ṛgveda 7, 65, 16 のテキストである。そしてその韻律は，音節数 12+8×2 の puraüṣṇih となっている。本来のテキストの二行目が「我々は百年見たい。我々は百年生きたい」で終わっているので，その後さらなる願望を付け加えて，この形のマントラにしたものである。Kane [1974: 318] はリグヴェーダの本来のテキストが太陽の礼拝に用いられることを教えている。付加された部分をも含めてこの形でのマントラに関しては Vidyārṇava [1918: 105] がヤジュルヴェーダの伝統による朝の礼拝の記述で，その使用を紹介している。しかし，歴史的に，この付加がいつ行われたかは，今の私にはわからない。

52) oṃ śvetavarṇā samuddiṣṭā kauśeyavasanā tathā /
　　śvetair vilepanaiḥ puṣpair alaṃkāraiś ca śobhitā //
　　ādityamaṇḍalāntaḥsthā brahmalokagatāthavā /
　　akṣasūtradharā devī padmāsanagatā śubhā //
　このマントラの出典をサンスクリット文献に見つけることはできなかった。なお，Vidyārṇava [1918: 107] はヤジュルヴェーダの伝統の朝の礼拝の記述のところで，このマントラとほぼ同じものをガーヤトリーの観想のマントラとして伝えている。

作者は神々，シュクラを神格とし，韻律はガーヤトリー，ガーヤトリーを招く際に用いる。

「汝は威力。汝は白い輝き。汝は不死。汝は神々に好まれる場所というもの。汝は損なわれることのない祭場。」[53)]

II-6-c 礼拝 (upasthāna)

第二十一のマントラ (p. 12, 1.15–19)「世界のかなたの」というマントラの作者はヴィマラ，韻律はアヌシュトゥブ，最高のアートマンが神格，ガーヤトリーを礼拝する際に用いる。

「汝はガーヤトリー。汝は一本足，二本足，三本足，四本足，足無しなり。なぜなら，汝は倒れないから。汝の四番目の，顕示された，世界のかなたの足に頂礼。何某はかのものを得ることがないように。」[54)]

---

53) oṃ téjo 'si śukrám asy amṛ́tam asi /
dhā́ma nā́māsi priyáṃ devā́nām ánādhṛṣṭaṃ devayájanam asi //

Vājasaneyi Saṃhitā 1, 31, c–d. このマントラはヴェーダ祭式においては，新月・満月祭などの儀礼に用いる溶けたバターを清める際に用いられていた [Hillebrandt 1879: 61]。viniyoga のところで，このマントラの韻律をガーヤトリーと言うが，このマントラは韻文ではなく，yajus と呼ばれる散文の定形句で，韻律の指定を持たない。しかし，今の場合，ガーヤトリーを招く際に用いるとして，ガーヤトリーとの関連で，韻律そのものもガーヤトリーと想定したのであろう。Devībhāgavata Purāṇa 11, 17, 71ab はこのマントラを用いて女神ガーヤトリーを招くと説く：tejo 'sityādimantreṇa devīm āvāhayet tataḥ「『汝は光輝なり』に始まるマントラによって女神をそれからお招きすべし」。Vidyārṇava [1918: 106] もこのマントラをガーヤトリーのお招きのマントラとして使うことを教えている。しかし，意味のうえからは，後にくる第二十二のマントラの方が，お招きのマントラとしてはふさわしいように思える。注55を参照されたい。

54) gāyátry asy ékapadī dvipádī tripádī cátuṣpady ápad asi na hí pádyase
námas te turīyā́ya darśatā́ya padā́ya parórajase 'sā́v adó mā́ prā́pad //

Śatapatha Brāhmaṇa 14, 8, 15, 10=Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad 5, 14, 7. Śatapatha Brāhmaṇa 14, 8, 15=Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad 5, 14 の章はガーヤトリーに関する最初の思弁を伝える文献である。そこですでにガーヤトリーの礼拝のためのマントラとされている：（このマントラの直前に次の短い注記がある）tásyā upasthā́nam「それ（ガーヤトリーの）礼拝」。このマントラの最後の部分「何某はかのものを得ることがないように」でいう「何某」とはこのマントラを唱える者が憎む相手を指し (yáṃ dviṣyā́t)，ヴェーダの文献のここで，このガーヤ↗

第二十二のマントラ (p. 13,1.1–2)

「オーム。来たれ，願望をかなえる者よ，女神よ，三つの音節よりなるものよ，ブラフマンを語るものよ，ガーヤトリーよ，韻律の母よ。唱える時，私のそばにいよ。」[55]

と，唱えて，両手に持ったさじの柄の方から水を前に置いているボウルにすてる。

II-6-d ムドラー (mudrā)

第二十三のマントラ

「オーム。合わせた形，半球の形，広げた形，そして伸ばした形，一つの顔の形，二つの顔の形，三つの顔の形，四つ，五つの顔の形，時の顔の形，下に向いた形，そしてヴィヤーパカアンジャリの形，荷車の形，ヤマの綱の形，結んだ形，合わせて上に向いた形，ぶら下がった形，にぎりこぶしの形，魚の形，カメの形，イ

このマントラを唱えて二十五個のムドラーを両手で作る。合わせた形：上向きの合掌(写真5)，半球の形：下向きの合掌(写真6)，広げた形：指先を下に向けて掌をV字型に広げる(写真7)，伸ばした形：掌を上向きに広げた合わせる（写真8)，一つの顔の形：両手を上向きにし，小指だけを合わせる，五つの顔の形まで

↘トリーの礼拝は一種の呪いとしても用いられていた。この Śatapatha Brāhmaṇa 以降，マントラとしてのガーヤトリーはさまざまな思弁の対象となっていく [Gonda 1963a: 284–294]。数多くのプラーナ文献でガーヤトリーの偉大さ gāyatrī māhātmya としてこの思弁の伝統は続いていった [Gupta 1971: 790]。Vidyārṇava [1918: 106] はヤジュルヴェーダの伝統とされる朝の礼拝でこのガーヤトリーの礼拝を伝えている。中世のサンスクリット文献として，このマントラの用法を伝えるものに Nārada Purāṇa 1, 27, 54ab がある：tejo 'si gāyatry asīti prārthayet savitur mahaḥ「『汝は威力なり。』『汝はガーヤトリーなり。』と唱えて，太陽 (savitṛ) の偉大さを請い求める」。ここでは，第二十と二十一のマントラに，冒頭の詩句を引用して言及しているものと思える。しかし，このナーラダプラーナの指定，つまり，このマントラによって太陽の偉大さを請うというのは，現代の用例に完全に対応するものではない。

55) oṃ āgaccha varade devi tryakṣare brahmavādini /
gāyatri cchandasāṃ mātar jape me saṃnidhau bhava //

注53で述べたように，このマントラが内容上お招きのマントラとしてはふさわしいように思える。このマントラにかなり類似したマントラを Nārada Purāṇa 1, 27, 43cd–44ab が伝えている：

āgaccha varade devi tryakṣare brahmavādini // 43
gāyatri cchandasāṃ mātar brahmayone namo 'stu te /

二行目の前半までは同一である。後半は「ブラフマンを母胎とするものよ。汝に頂礼あれ」と異なったテキストを伝えている。Devībhāgavata Purāṇa 11, 16, 59 はさらに相違を示す：

āgaccha varade devi gāyatri brahmarūpiṇi /
japānusthānasiddhyarthaṃ praviśya hṛdayaṃ mama //

「来たれ，願望をかなえる者よ，女神よ，ガーヤトリーよ，ブラフマンの姿をした者よ，つぶやきの実行が成就するために，私の心臓にはいって下さい」。Kane [1974: 304, n. 721] および，Vidyārṇava [1918: 106] が伝える，対応するマントラもすべて，若干の異動を示している。

ノシシの形，ライオンの歩みの形，大いなる歩みの形，ハンマーの形，そしてつぼみの形。これらのムドラーを知らないと，ガーヤトリーは無駄になってしまう。」[56)]

次々と薬指，中指，人差指，親指と合わせていく(写真9)，時の顔の形：手のひらの付根の部分のみを合わせ，上向きにV字型に広げる(写真10)，下に向いた形：それを下向きにする(写真11)，ヴィヤーパカアンジャリの形：四番目の伸ばした形とほぼ同じ(写真12)，荷車の形：両手の親指と人差指で輪を作りかみ合わせる(写真13)，ヤマの綱の形：右手の人差指のはらと左手の小指のはら，左手の人差指のはらと右手の小指のはらをそれぞれ中央部で合わせ，左手の薬指と中指の背を右手の人差指の背に，同じく右手の薬指と中指の背を左手の人差指の背に合わせる(写真14)，結んだ形：右手は下に，左手は上にして，人差指をカギ型に合わせる(写真15)，合わせた形：両手の指先をそれぞれ合わせて，向き合わせる（写真16)，ぶら下がった形：右手を前向きに広げて右耳の横にもっていく(写真17)，にぎりこぶしの形：右耳の横でにぎりこぶしにする(写真18)，魚の形：下向きの左手の上に下向きの右手を重ねる（写真19)，カメの形：親指と人差指を伸ばしてそれぞれ合わせる(写真20)，イノシシの形：親指，人差指と小指を伸ばした両手を下向きにして口の両横にもっていく

56) oṃ saṃmukhaṃ saṃpuṭaṃ caiva vitataṃ vistṛtaṃ tathā /
ekamukhaṃ dvimukhaṃ ca trimukhaṃ caturpañcamukham //
kālamukham adhomukhaṃ vyāpakāñjalikaṃ tathā /
śakaṭaṃ yamapāśaṃ ca grathitaṃ saṃmukhonmukham //
pralambaṃ muṣṭikaṃ caiva matsyaḥ kūrmaḥ varāhakaḥ /
siṃhakrāntaṃ mahākrāntaṃ mudgaraṃ pallavaṃ tathā //
etāṃ mudrāṃ na jānāmi gāyatri niṣphalā bhavet /
ほぼ同じテキストを Devībhāgavata Purāṇa 11, 16, 99–101 が伝えている [Kane 1977: 127; *cf.* Kane 1974: 320]。ムドラーに関しては [Gonda 1977: 73, n.151] に列挙されている諸文献を参照されたい。

(写真21)，ライオンの歩みの形：イノシシの形を口の両横で上向きにする（写真22)，大いなる歩みの形：ライオンの形をこめかみの横にもっていく(写真23)，ハンマーの形：十八番目のにぎりこぶしの形と同じ(写真24)，つぼみの形：十七番目のぶら下がった形と同じ(写真25)。

II-6-e 黙ってガーヤトリーを唱える (japa)

マントラを唱えた後，左肩に掛けている手拭の下端に右手を隠し，黙禱する（約1分8秒)[57]。

II-6-f おわかれ (visarjana)

第二十四のマントラ (p. 13, 1.7–8)

「オーム。北の山頂で生まれた方よ，地上で山に住む方よ，ブラフマー神に許しを得た方よ，行け，女神よ，気のむくままに。」[58]

と，唱えて，右手のさじで水を一回ボウルにすてる。

この後，トゥルシーの首輪[59]をはずす。

57) この間，彼は注24で例示した七つの vyāhṛti と，注34で説明したガーヤトリーのマントラと，注37の「ガーヤトリーの頭」といわれるマントラの組合せを黙って心の中で唱えている。彼がこの時，このセットのマントラを何回唱えたかに関して情報を持ちあわせていない。この回数に関するダルマ文献の意見に関しては [Kane 1974: 304] を参照せられたい。

58) oṃ uttare śikhare jāte bhūmyāṃ parvatavāsini /
brahmaṇā samanujñāte gaccha devi yathāsukham //

Nārada Purāṇa 1, 27, 62ab は，このマントラの冒頭の部分 uttare のみを挙げて，このマントラに言及している：tato visṛjya tāṃ vipra utara iti mantrataḥ「それから彼女（つまり女神としてのガーヤトリー）を『北の』というマントラによって去らせて，バラモンよ」。ここでナーラダプラーナがこのマントラを冒頭の語句によってのみ引用しているということは，すでにこの時代に，ガーヤトリーのお別れのマントラとして，このマントラか，または，これに類似するマントラが定着していたことを示していると思われる。なお，Kane [1974: 304, n. 721] および Vidyārṇava [1918: 63, 110] は類似のマントラの使用を伝えている。

59) トゥルシー (skt. tulasī) はシソ科の植物で，ミティラー地方ではほとんどの家の中庭の東北の隅に，盛り土の上に植えられていて，プージャーの対象になる。426頁を見よ。この植物は特にヴィシュヌの崇拝者達によって神聖なものとみなされている [Dubois 1906: 881–882, Williams 1883: 333–335]。このトゥルシーの茎を乾かして，5 mm ほどに切ったものを糸に通して首飾りを作り，ヴィシュヌの崇拝者達は掛けている [Gonda 1963b: 156, 1969: 14]。しかし，このトゥルシーとヴィシュヌとの関係は歴史的に見て新しいものとされ，Hazra は，プラーナ文献の中で新層の部分の判断基準の一つとして，このトゥルシーへの言及を挙げている [Hazra 1940: 57, 78, 79, 90, 114, 115, 117, 124]。そして，Kane [1977: 882] によると，トゥルシーのまとまった神話がパドマ・プラーナにある。さらに [Mani 1975: 797–798] を参照。今，この時点でこのトゥルシーの首飾りをはずすのは，これから行われるタルパナで，その主たる対象が死者の王ヤマや，祖霊，先祖の霊などであるからであろうか。

II-7　満足させること (tarpaṇa)

II-7-a 神々のタルパナ

第二十五のマントラ (p. 13, 1.17–p. 14, 1.3)

「オーム。満足させるべき神々は来たれ[60]。オーム。ブラフマーは満足せよ。オーム。ヴィシュヌは満足せよ。オーム。ルドラは満足せよ。オーム。プラジャーパティは満足せよ。」[61]「オーム。神々，ヤクシャ達，そしてナーガ達，ガンダルヴァ・アプサラス達，アスラ達，恐ろしい蛇達，スパルナ達，木々，ジャンブカ達，鳥達，ヴィドゥヤーダラ達，ジャラーダラ達，そして虚空を行くもの達，拠所なく生きている者達，そして悪しき不道徳に喜ぶもの達，それらを満たすために今私によって水が与えられる。」[62]

このマントラを唱えつつ，両手でさじを持ち，柄の方から水を少しずつ前のボウルにこぼす。

II-7-b サナカ達のタルパナ

第二十六のマントラ (p. 14, 1.6–9)

「オーム。サナカ達は来たれ[64]。オーム。サナカと，サナンダと，三番目にサナータナと，カピラと，アースリと，

祭紐を首から前にたらす[63]。両手でさじを持ち，柄を右向けにして，水を少しずつこぼす。

---

60) oṃ tarpaṇīyā devā āgacchantu //

61) oṃ brahmā tṛpyatām / oṃ viṣṇus tṛpyatām / oṃ rudras tṛpyatām /
oṃ prajāpatis tṛpyatām /

Vidyārṇava [1918: 23] はこのマントラの使用を伝える。Padma Purāṇa 1, 20, 156ab を参照：brahmāṇaṃ tarpayet pūrvaṃ viṣṇurudraprajāpatīn「ブラフマンを先ず満足させるべし，(次いで) ヴィシュヌ，ルドラ，プラジャーパティを」。

62) oṃ devā yakṣās tathā nāgā gandharvāpsaraso 'surāḥ /
krūrāḥ sarpās suparṇāś ca taravo jambhagāḥ khagāḥ /
vidyādharā jalādhārās tathaivākāśagāminaḥ /
nirādhārāś ca ye jivāḥ pāpe 'dharme ratāś ca ye /
teṣām āpyāyanāyaitad diyate salilaṃ mayā //

このマントラは Padma Purāṇa 1, 20, 156cd–158 にある。Śabdakalpadruma の jambhaga の項に，Āhnikācāratattva に引用されている Padma Purnāṇa のテキストとして，これに対応するマントラが伝えられている。そこでは四行目の nirādhārāś が nirāhārāś「食べ物なく」となっていて，Vidyārṇava [1918: 23] も，それと同じ読みを取っている。

ヴォードゥと，そしてパンチャシカと。
彼等すべては私が与える水によって常に
満足へおもむけ。」[65)]

このマントラを二回繰り返し，動作も繰り返す。

II-7-c マリーチ達のタルパナ

第二十七のマントラ (p. 14, 1.13–17)

「オーム。マリーチ達は来たれ[66)]。
オーム。マリーチ達は満足せよ。オーム。
アトリは満足せよ。オーム。アンギラス
は満足せよ。オーム。プラスティヤは満
足せよ。オーム。プラハは満足せよ。ク
ラトゥは満足せよ。プラチェータスは満
足せよ。オーム。ヴァシシュタは満足せ
よ。オーム。ブリグは満足せよ。オーム。
ナーラダは満足せよ。」[67)]

祭紐を左肩から右脇に掛ける。
両手でさじを持ち，柄の方から，オーム
と唱える毎に，水をすてる。

63) 今まで，祭紐を左肩から右脇に掛けていた。これは神々への行為を行う場合の掛け方である。この時点で，祭紐を首から垂らすようにして掛けるが，これは人間への行為の場合の掛け方で，あと一つ，行為が祖霊に対して行われる場合は，右肩から左脇にかけて掛けられる [Caland 1924: 44; Chakrabarti 1980: 152–153]。この，祭紐の三つの掛け方はヴェーダの時代からの伝統である。この時点で呼びかけられるサナカ達は聖仙 (ṛṣi) と呼ばれる存在で，彼等は神でもなく，祖霊でもない人間とみなされているわけである。Padma Purāṇa 1, 20, 159b–d はこの祭紐に関する規定も伝えている：nivītī ca bhavet tataḥ / manuṣyāṃs tarpayed bhaktyā ṛṣiputrān ṛṣiṃs tathā「それから祭紐を前に垂らすべし。献身をもって人間達を満足させるべし，聖仙の息子達を，そして聖仙達を」。

64) oṃ sanakādaya āgacchantu //

65) oṃ sanakaś ca sanandaś ca tṛtīyaś ca sanātanaḥ /
kapilaś cāsuriś caiva voḍhuḥ pañcaśikhas tathā /
sarve te tṛptim āyantu maddattenāmbunā sadā //

このマントラは Padma Purāṇa 1, 20, 160–161ab に同じ形で伝えられている。この七人の名前は，このマントラの最初の二行のそれぞれの名前を，このように主格ではなく，対格の形で，Pāraskara Gṛhyasūtra の補遺文献 Kātyāyana の Snānasūtra (Pāraskara Gṛhyasūtra p. 418, 1.2–3) にも伝えられている [Kane 1974: 693]。また，注36で紹介した Bṛhadyogiyājñavalkya 7, 65cd–66ab にもこのマントラの最初の二行が同じ形で伝えられている [Dreyer 1986: 99, 1.2–3]。

66) oṃ marīcyādaya āgacchantu //

このマントラを唱える直前で，祭紐は再び，神々に対する行為の場合の掛け方，つまり，左肩から右脇に掛け直される。つまり，マリーチ達の聖仙は，この直前のサナカ達の聖仙と違って，神々とみなされているわけである。

67) oṃ marīcis tṛpyatām / oṃ atris tṛpyatām / oṃ aṅgirās tṛpyatām /
oṃ pulastyas tṛpyatām / oṃ pulahas tṛpyatām / oṃ kratus tṛpyatām /

II-7-d 祖霊一般のタルパナ

第二十八のマントラ (p. 14, 1.20–p. 15, 1.9)

「オーム。火に味わわれた（祖霊）達は来たれ[69]。

オーム。火に味わわれた（祖霊）達は満足せよ。これは水。彼等に対してスヴァダー，ナマス。オーム。ソーマとかかわる者達は満足せよ。これは水。彼等に対してスヴァダー，ナマス。オーム。供物を持つもの達は満足せよ。これは水。彼等に対してスヴァダー，ナマス。オーム。湯気を飲むもの達は満足せよ。これは水。彼等に対してスヴァダー，ナマス。オーム。良き時を持つもの達は満足せよ。これは水。彼等に対してスヴァダー，ナマス。オーム。祭の座に座るもの達は満足せよ。これは水。彼等に対してスヴァダー，ナマス。オーム。溶けたバターを飲むもの達は満足せよ。これは水。彼等に対してスヴァダー，ナマス。」[70]

祭紐を右肩から左脇に掛ける。南の方を向いて座りなおす[68]。

さじを右手に持ち，柄の方から，オームと唱える毎に，水を少しずつすてる。

↘ oṃ pracetās tṛpyatām / oṃ vasiṣṭhas tṛpyatām / oṃ bhṛgus tṛpyatām / oṃ nāradas tṛpyatām //

oṃ と tṛpyatām を伴ったこの形ではなく，それぞれの聖仙の名前だけをこのマントラと同じ順序で Padma Purāṇa 1, 20, 161cd–162 は伝えている：marīcim atryaṅgirasau pulastyaṃ pulahaṃ kratum // 161 // pracetasaṃ vasiṣṭhaṃ ca bhṛguṃ nāradam eva ca / devabrahmarṣin sarvāṃs tarpayet sākṣatodakaiḥ //「マリーチ，アトリ，アンギラス，プラスティヤ，プラハ，クラトゥ，プラチェータス，ヴァシシュタそしてブリグとナーラダ（といった）神的な神々しい聖仙達をすべてコメを混ぜた水で満足させるべし」。これらの聖仙はヴェーダの時代から原則的に「七人の聖仙」(saptarṣi) の名のもとに，さまざまなグループを構成して，列挙されてきた [Mitchiner 1982: 3–42]。この十人の，この順序によるリストに関して [Mitchiner 1982: 39] を参照。

68) 今から祖霊達に対する行為が行われるので，祭紐は右肩から左脇に掛けられ，彼は南面する。この方法はヴェーダ以来の伝統である [Chakrabarti 1980: 153]。

69) oṃ agniṣvāttādaya āgacchantu //

70) oṃ agniṣvāttās tṛpyantām idaṃ jalaṃ tebhyaḥ svadhā namaḥ /
oṃ saumyās tṛpyantām idaṃ jalaṃ tebhyaḥ svadhā namaḥ /
oṃ haviṣmantas tṛpyantām idaṃ jalaṃ tebhyaḥ svadhā namaḥ /
oṃ ūṣmapās tṛpyantām idaṃ jalaṃ tebhyaḥ svadhā namaḥ /
oṃ sukālinas tṛpyantām idaṃ jalaṃ tebhyaḥ svadhā namaḥ / ↗

II-7-e ヤマ達のタルパナ

第二十九のマントラ (p. 15, 1.10–18)

「オーム。ヤマ達は来たれ[71]。オーム。ヤマに対して頂礼。オーム。法の王に対して頂礼。オーム。死に対して頂礼。オーム。最後をもたらす者に対して頂礼。オーム。ヴィヴァスヴァットの子に対して頂礼。オーム。時に頂礼。オーム。すべての生きものを殺す者に対して頂礼。オーム。イチジクの実の色をしたものに対して頂礼。オーム。ダドゥナに対して頂礼。オーム。青黒いものに対して頂礼。オーム。最高の所に立つものに対して頂礼。オーム。オオカミの腹をしたものに対して頂礼。オーム。チトラに対して頂礼。オーム。チトラグプタに対して頂礼。オーム。これら十四人のヤマ達は満足して平安をもたらせ。」[72]

さじを右手に持ち，柄の方から，オームと唱える毎に，水を少しずつすてる。途中で，二回，水をさじに補給する。

II-7-f 先祖の霊のタルパナ

第三十のマントラ (*cf.* p. 16, 1.1–p. 17, 1.6)

「私の祖霊達は来たれ。ここで一掬の水

小さい銅の容器を左手に持ち，そこから

↘ oṃ barhiṣadas tṛpyantām idaṃ jalaṃ tebhyaḥ svadhā namaḥ /
oṃ ājyapās tṛpyantām idaṃ jalaṃ tebhyaḥ svadhā namaḥ /

Padma Purāṇa 1, 20, 163cd–164 はこの順序で満足させるべき七種の祖霊達を列挙している：agniṣvāttāṃs tathā saumyān haviṣmatas tathoṣmapān //163// sukālino barhiṣadas tathā caivājyapān punaḥ / saṃtarpayet pitṛn bhaktyā satilodakacandanaiḥ // 「火に味わわれた者達，同じくソーマとかかわる者達，供物を持つ者達，同じく湯気を飲む者達，良き時を持つ者達，同じく祭の座に座る者達，そして更に溶けたバターを飲む者達といった祖霊達を献身の情をもって，ゴマのはいった水とビャクダンで，一緒に満足させるべし」。このように，ヴェーダの時代から祖霊に関していくつかの分類が試みられていた [Hillebrandt 1929: 403–404]。しかし，今挙げた七種の祖霊達の分類がどの文献までさかのぼれるのかは今のところ不明である。なお，このマントラで namaḥ「頂礼」の前で svadhā なる語が使われている。この語はヴェーダの宗教以来，祖霊達への儀礼に用いられるものとされていた。例えば，Taittirīya Saṃhitā 6, 3, 2, 5–6 に次のような記述がある：námo devébhya íty āha namaskāró hí devānāṃ svadhá pitṛbhya íty āha svadhākāró hí //5// pitṛṇám「『神々に対してナマス』と唱える。何故なら，ナマスという発語は神々のものであるから。『祖霊達に対してスヴァダー』と唱える。何故なら，スヴァダーという発語は祖霊達のものであるから」[Oldenberg 1917: 531; Einoo 1988: 234–236]。

71) oṃ yamādaya āgacchantu //

を受け取れ[73]。

オーム。今日，バーラドヴァージャ・ゴートラに属する父，ラグナンダナ・シャルマンは満足せよ。ここにゴマ入りの水がある。彼に対してスヴァダー。彼に対してスヴァダー。彼に対してスヴァダー[74]

（この後，以下の祖霊達の名前が列挙される。2．父方の祖父，3．父方の曽祖父，4．父方の曽祖父の父，5．母方の祖父，6．母方の曽祖父，7．母方の曽祖父の父，8．母，9．父方の祖母，10．父方の曽祖母，11．父方の曽祖母の母，12．母方の祖母，13．母方の曽祖母，14．母方の曽祖母の母，15．父方の祖父の兄弟の子，21．父方の曽祖父の兄弟の孫，22．父方の曽祖父の兄弟の子，23—25．父方の祖父の兄弟，26—27．父方の曽祖父の兄弟，28．父方の曽祖父の父の兄弟の子，29．？，30—31．母の兄弟，32．母方の曽祖父の兄弟の子，33．母方の曽祖父の兄弟，34．父の母方の祖父，35．母の母方の祖父，36．？）（図2）。

直接，右手に持ったさじに水を入れ，「彼に対して，スヴァダー」と三回唱える毎に，三回，さじから水をこぼす。

---

72) oṃ yamāya namaḥ / oṃ dharmarājāya namaḥ / oṃ mṛtyave namaḥ /
oṃ antakāya namaḥ / oṃ vaivasvatāya namaḥ / oṃ kālāya namaḥ /
oṃ sarvabhūtakṣayāya namaḥ / oṃ audumbarāya namaḥ / oṃ dadhnāya namaḥ /
oṃ nīlāya namaḥ / oṃ parameṣṭhine namaḥ / oṃ vṛkodarāya namaḥ /
oṃ citrāya namaḥ / oṃ citraguptāya namaḥ /
oṃ caturdaśaite yamāḥ svasti kurvantu tarpitāḥ //

このマントラで列挙されている十四人のヤマの名前は，注65で紹介した Pāraskara Gṛhyasūtra の補遺文献である Kātyāyana 作の Snānasūtra (Pāraskara Gṛhyasūtra p. 418, 1.4–6) に，同じ順序で言及されている。

73) āgacchantu me pitara imaṃ gṛhnantv apo 'ñjalim //

74) oṃ adya bhāradvājagotraḥ pitā raghunandanaśarmā tṛpyatām idaṃ satilaṃ
jalaṃ tasmai svadhā tasmai svadhā tasmai svadhā //

父の名前 Raghunandanaśarmā の最後の部分 śarman はバラモンの名前の後に付けられる呼称である [Kane 1974: 250–251]。マハーデーヴァ・プージャーの最後の局面で，祖霊達にプージャーの終了が宣言されるとき，父，祖父，曽祖父および母方の祖父，曽祖父，そして曽祖父の父が bhagavaccharman と総称されるが，その場合，先祖達が神とみなされ bhagavat で呼ばれ，その後，彼等がバラモンであったことが śarman によって表現されていることになる。436～437頁を見よ。

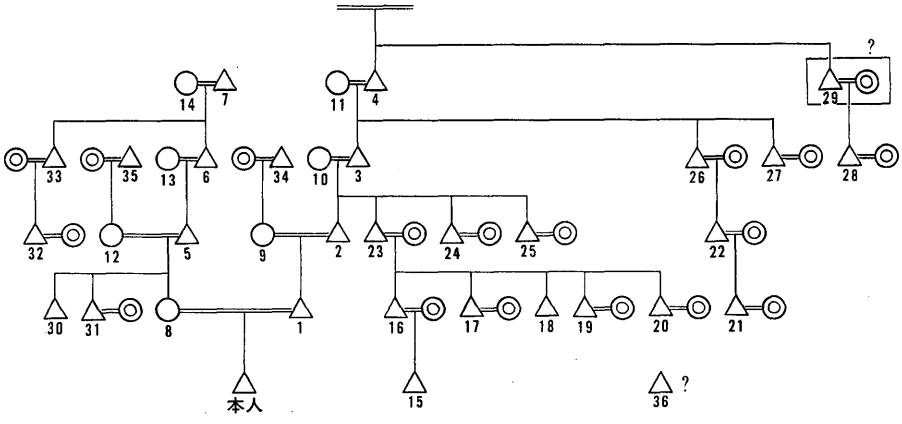

図2　供養される先祖とその順位

ヴェーダ期において祖霊 pitṛ (複数形を用いる) といえば，父 (pitṛ), 父方の祖父 (pitāmaha), 父方の曾祖父 (prapitāmaha) の三代を指していた [Kane 1973: 334–335, 347; Einoo 1988: 253]。ところが今の場合，第四番目に父方の曾祖父の父 (vṛddhaprapitāmaha) までが挙げられている。それと平行して八番目から十一番目まで，父の妻，つまり本人の母から父方の曾祖父の父の妻まで四代の名前が挙げられている。この三代の祖先から四代の祖先への拡大は次のように説明できると思われる。つまり，母方では，五番目から七番目まで母方の祖父 (mātāmaha) から始まる三代，つまり，母方の曾祖父 (pramātāmaha)，母方の曾祖父の父 (vṛddhapramātāmaha) が列挙されているが，それは伝統的な三代の祖霊の条件を満たしているが，その最後の代が，本人からみた四代前の曾祖父の父の代になってしまう。そこで，伝統的な三代の祖先を，母方の祖先の代に合わせて，父方も四代前までと拡大したのであろう。この図でさらに興味があるのは第十五番目から二十八番目までの父方の親族の順序である。特に二十一番目，二十二番目，二十八番目の親族が，本人からの親族関係の遠近によって位置付けられるのではなく，親族全体の世代の順序に従って順位を得ていることである。したがって，父方の親族は全体として，本人に近い世代から遠い世代へと遡る順序が実現している。これと同じことが三十番目から三十五番目までの父方の親族以外の親族でも実現している。なお図2の親族名称は以下の通りである。1. pitṛ, 2. pitāmaha, 3. prapitāmaha, 4. vṛddhaprapitāmaha, 5. mātāmaha, 6. pramātāmaha, 7. vṛddhapramātāmaha, 8. mātṛ, 9. pitāmahī, 10. prapitāmahī, 11. vṛddhaprapitāmahī, 12. mātāmahī, 13. pramātāmahī, 14. vṛddhapramātāmahī, 15. pitāmahabhrātṛpautra, 16–20. pitāmahabhrātṛputra, 21. prapitāmahabhrātṛpautra, 22. prapitāmahabhrātṛputra, 23–25. pitāmahabhrātṛ, 26–27. prapitāmahabhrātṛ, 28. vṛddhaprapitāmahabhrātṛputra, 29. ?, 30–31. mātula, 32. pramātāmahabhrātṛputra, 33. pramātāmahabhrātṛ, 34. pitṛmātāmaha, 35. mātṛmātāmaha, 36. ?. △=◎ の ◎ は，夫のみが親族名称や名前等で言及されているが，妻は「妻と共に」sapatniḥ という表現で言及されている女性の成員を指す。

II-7-g 名もなき祖霊達のタルパナ

第三十一のマントラ

「ブラフマー神から草にいたるまでの神々，聖仙，祖霊，人間達は満足せよ。すべての祖霊達は，母，祖母をはじめとす

第三十一と第三十二のマントラを唱えつつ，右手に持ったさじの柄の部分から，少しずつ，とぎれないようにして，水を

るもの達は。」[75]

こぼす。

第三十二のマントラ

「過去の一千万の家庭の，七つの大陸に住む彼等を満たすために，今，私によって水が与えられる。」[76]

第三十三のマントラ (p. 17, 1.14–15)

「オーム。我々の家に生まれ，一族に属し，息子なくして死んだもの達は私が着物をしぼって与える水を飲め。」[77]

手拭の先に二回水をかけ，前かがみになって，ぬれた部分をしぼり，水をこぼす。

II-8　太陽への敬い水 (sūrya-arghya)

第三十四のマントラ (p. 13, 1.10–12)

「オーム。頂礼，ヴィヴァスヴァットに，ブラフマンよ，光をもつものに，ヴィシュヌの力をもつものに，世界を駆り立てるものに，清らかなものに，サヴィトリに，行為を与えるものに[78]。ここに敬いの水がある。オーム。世尊，聖なる太陽に頂礼。」[79]

祭紐を左肩から右脇にかける。トゥルシーの首輪をかける。

今まで座っていた座から立上り，中庭に出て立ち，太陽に向かってこのマントラを三回唱える。左手に銅の小さい容器を持ち，右手にさじを持つ。

---

75) ābrahmastambaparyantadevarṣipitṛmānavāḥ /
　tṛpyantu pitaraḥ sarve mātṛmātāmahādayaḥ //
この同じマントラは Skanda Purāṇa 3, 2, 5, 111cd–112ab; 4, 1, 35, 182 に伝えられている。

76) oṃ atītakulakoṭīnāṃ saptadvīpanivāsinām /
　teṣām āpyāyanāyaitad dīyate salilaṃ mayā //
このマントラの前半一行分は Skanda Purāṇa 4, 1, 35, 183ab にある。

77) oṃ ye cāsmākaṃ kule jātā aputrā gotrino mṛtāḥ /
　te pibantu mayā dattaṃ vastraniṣpīḍanodakam //
Skanda Purāṇa 4, 1, 35, 184 の伝えるマントラは若干の相違を示す：
　ye cāsmākaṃ kule jātā aputrā gotrino mṛtāḥ /
　sarve te tṛptim āyantu vastraniṣpīḍanodakaiḥ //
「我々の家に生まれ，一族に属し，息子なくして死んだもの達はすべて，着物をしぼっての水によって満足へとおもむけ」。

78) oṃ namo vivasvate brahman bhāsvate viṣṇutejase /
　jagatsavitre śucaye savitre karmadāyine //
Viṣṇu Purāṇa 3, 11, 40 に最後の語 karmadāyine のかわりに karmasākṣiṇe「行為の目撃者に」を使った同様のマントラが，太陽に一掬の水を与える際に用いるものとして伝えられている。

79) eṣo 'rghaḥ / oṃ bhagavate śrīsūryāya namaḥ //

「聖なる太陽に頂礼」と唱える毎に，右手に持ったさじの柄の部分から，水をこぼす（写真26)。
その後，銅の小さい容器を置き，両手でさじを持ち，柄の部分から水をこぼす。そしてさじを置く。

II-9　お　ゆ　る　し

第三十五のマントラ

「オーム。バラモン殺しに相当するようなどんな罪でも，それらは滅びる，右回りに回るたびに。」[80)]

このマントラを唱えて，一回両手を合わせる。右回りに一回まわる。もとの位置に来て，立ち，両手をそれぞれ広げたまま両耳のところにもっていき，おじぎして，合掌する。
このマントラを全部で三回唱え，この同じ動作を三回繰り返す。
顔の前で両手をムドラーの時のヤマの輪の形に合わせ，太陽を見ながらこのマントラを唱える。

第三十六のマントラ

「私は罪人です。私は罪を行うものです。罪の心を持ち，罪から生まれました。ハスの目をしたお方は私を救って下さい，すべての罪をはらうハリ神は。」[81)]

マントラが終わると，顔の前で両手を合わせ，左足で片足立ちをして，礼拝する。

---

80) oṃ yāni kāni ca pāpāni brahmahatyāsamāni ca /
tāni tāni naśyanti pradakṣiṇaṃ pade pade // [Bühnemann 1988: 174] を参照。
81) pāpo 'haṃ pāpakarmāhaṃ pāpātmā pāpasaṃbhavaḥ /
trāhi māṃ puṇḍarīkākṣiḥ sarvapāpaharo hariḥ //

Ⅲ　神々へのプージャー (Pūjā)

Ⅲ-1　準　備

再び，座に戻る。北側を向いて座る。カガミを見ながら，額にていねいにすった赤いビャクダンを塗る[82]。

灰を水で溶かし，両手に広げ，カガミを見ながら中指で額に横線を三本引く[83]。右手の中指で左の横首に，左手の中指で右の横首に二本線を引く。右手の人差指，中指，薬指で左の上腕に三本，下腕に二本線を引き，右手で同じく右の腕に線を引く。さらに，右手で左足のくるぶしの前，左手で右足のくるぶしの前，右手で左の乳首の上と下に，左手で右の乳首の上と下に，最後に両手で同時に腎臓のあたりに灰を付ける（図3）。手を洗う。

図3　灰を身体に塗る

体に灰を付けたあとで，白米をビャクダンをする石の上に，六つの小さなかたまりにして置く[84]。さらに白米を銅の小皿の上に十一の小さなかたまりにして置き[85]，その上にトゥルシーの葉を一枚置く。

ほら貝を洗い，銅の小皿にのせ，自分の前に置く。

トゥルシーの葉の先にビャクダンを付け

82) 石井氏の情報によると，赤いビャクダンで作った点は thop と呼ばれる。
83) この三本の線は tripuṇḍra と呼ばれ，灰で塗られる [Kane 1974: 673]。
84) これら六つの米のかたまりはそれぞれ，1. 太陽をはじめとする五人の神々，2. ヴィシュヌとナルマデーシュヴァラ，3. ラクシュミー，4. サラスヴァティー，5. ドゥルガー，6. ブヴァネーシュヴァリーのためである。
85) これら十一個のかたまりは十一個あるマハーデーヴァの粘土で作ったリンガの数と一致している。

白米のはいっている銅の小皿に置く。
細い棒でビャクダンをていねいに別のトゥルシーの葉に付け，すり石の上に置く。
同じ動作を繰り返し，全部で六枚の葉をすり石の上に置く。
花びらをほぐして，かなりの量を白米のはいっている銅の小皿に入れる。
ナイフでバナナを小さく切り，四切れすり石の上に置く。同じくバナナを小さく切り，十一切れ，十一のかたまりの白米を置いた銅の小皿にのせる。
花びらを十一の部分に分け，その銅の小皿の上に置き，六つに分けた花びらをすり石の上に置き，残りの花びらをほら貝の上にのせる。
祭具を整える（図4）。

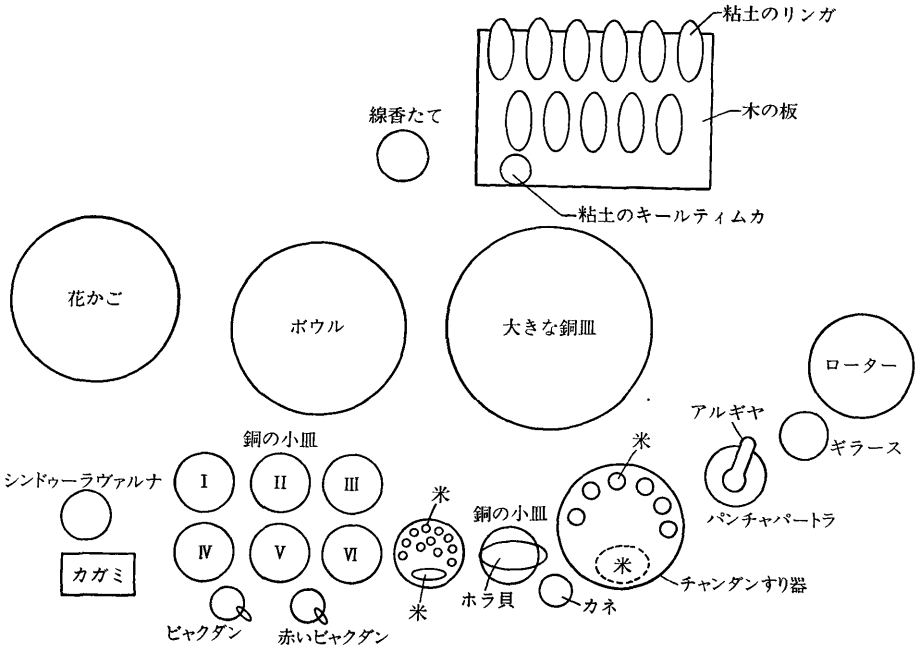

図4　祭具の配置図

小皿IIに二つのシャーラグラーマの石[86]を置く。今までシャーラグラーマ石がはいっていた容器の古い花は大きなボウルにすて，花カゴから新しい花びらをその容器に敷く。蓋の方にも花びらを入れ，蓋を上向きにして，一応容器の上に置き，左手横に置く。

III-2　太陽をはじめとする五人の神々へのプージャー (sūryādipañcadevatāḥ)[87]

第三十七のマントラ

「オーム。ブール，ブヴァハ，スヴァハ。オーム。ブール，ブヴァハ，スヴァハ。オーム。太陽をはじめとする五人の神々よ，汝らはここに来たれ。ここに立て。

供物置きの銅の皿の上の手前の米のかたまりから米を少し右手で取る。

「ここに来たれ」と唱えて，その米を小皿Iに置く。

これは足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水。

右手に持ったさじの柄の部分から小皿Iに水を入れる。

オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。

これは沐浴水，再び口濯ぎ水。

同じ動作で，小皿Iに水を入れる。

オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。

これは沐浴水，再び口濯ぎ水。

同じ動作で，小皿Iに水を入れる。

86) śālagrāma. このシャーラグラーマの石は，ヒマラヤ南麓の川，特にガンダキ川で見付けられる，アンモナイトの化石を含んだ石で，古くからヴィシュヌ神と結びつけられて崇拝の対象となっている。この石の崇拝に関してかなり早くから，研究がなされた。19世紀前半にはDubois [1906: 648–649] が報告し，Oppert [1893: 337–359] が詳しく論じている。20世紀になり，Kirfel [1935], Kohl-Bonn [1936], Shah [1938] などの論文が相次いで発表された。今の場合，第三十八のマントラから始まるヴィシュヌのプージャーの際にヴィシュヌとしてこのシャーラグラーマの石は扱われる。

87) sūryādipañcadevatāḥ. 朝の儀礼の際は太陽をはじめとする五人の神々，つまり，太陽 (Sūrya または Āditya)，ガネーシャ，デーヴィー，ルドラ，ナーラーヤナがまず礼拝の対象になる。礼拝が夕方行われる時には太陽とガネーシャの位置が変更されガネーシャをはじめとする五人の神々 (gaṇeśādipañcadevatāḥ) となる。

オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。

これはビャクダンの塗りもの。
オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。

すったビャクダンを右手でそなえ付けの小さい棒を使って小皿Ⅰに置く。

これは赤いビャクダンの塗りもの。
オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。

赤いビュクダンを右手でそなえ付けの小さい棒を使って小皿Ⅰに置く。

これは米。
オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。

供物置きの皿の六つの小さな米の山の中の第一の米の山を右手で取って，小皿Ⅰに置く。

これは花。
オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。

花カゴから取った花を小皿Ⅰに置く。

これはそれぞれ香，花，供物。
オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。

左手でカネを鳴らしながら，右手のさじの先の方を供物置きの皿の上で二回小さく回し，その後さじの柄の方から小皿Ⅰに水をかける。その後，さじの柄の方から一回水をボウルにすてる。

花を手にした合掌一回。
オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。

花カゴから取った花びらを両手にのせ，うやうやしく小皿Ⅰに置く。

これは口濯ぎ水。
オーム。太陽をはじめとする五人の神々に頂礼。」[88)]

右手のさじの柄の部分から水を一回ボウルにすてる。

88) oṃ bhūr bhuvaḥ svaḥ / oṃ bhūr bhuvaḥ svaḥ /
oṃ sūryādipañcadevatā ihāgacchata / iha tiṣṭhata /
etāni pādyārghācamanīyasnānīyapunarācamanīyāni /
oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /
idaṃ snānīyapunarācamanīyam / oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /
idaṃ snānīyapunarācamanīyam / oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /
idaṃ śrīkhaṇḍacandanaṃ lepanam / oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /
idaṃ raktacandanaṃ lepanam / oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /
idam akṣatam / oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /
etāni yathābhāgagandhapuṣpanaivedyāni / oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /
ekapuṣpañjaliḥ / oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /
idam ācamanīyam / oṃ sūryādipañcadevatābhyo namaḥ /

Ⅲ-3　ヴィシュヌへのプージャー (viṣṇu)

III-3-a　原人の歌 (puruṣasūkta)

第三十八のマントラ (p. 19,1.22–p. 21, 1.12)

「オーム。千の頭を持つプルシャ，千の目をして，千の足を持つ。彼は大地をあらゆるところで満たし，十指の高さ越えて立つ。(1)」「プルシャのみがこのすべて，過去のものも，未来のものも。そして不死性の支配者，（さらに）食物で成長するもの。(2)」「このようなのが彼の偉大さ。これよりさらにプルシャは力強い。この者の四分の一が一切の存在物。この者の四分の三は天の不死。(3)」「四分の三プルシャは上へと昇っていった。この者の四分の一がここに再び生起した。そこからさまざまな方向に分かれて行った，食べるもの，食べないものに向かって。(4)」「彼からヴィラージュが生まれた。ヴィラージュからプルシャが。彼は生まれると，後の方で，そしてまた前の方で大地を凌駕した。(5)」「完全に献じられた祭式からまだらのバターが集められた。それを動物へと造った，風の中の，森の中の，村の中の（動物に）。(8)」「完全に献じられた祭式から賛歌が，メロディーが生まれた。韻律がそれから生まれた。祈禱文がそれから生まれた。(9)」「それから馬が生まれた，そして上下に歯をもつもの達が。牛がそれから生まれた。山羊と羊がそれから生まれた。(10)」「彼に人々は祭式として祭の座で水をかけた，最初に生まれたプルシャに。それ

左手でカネを鳴らしながら，右手に持ったホラ貝で小皿Ⅱに水をたっぷりかける。

ホラ貝に水を入れ，もとの場所に戻す。

右手のさじで一回は先の方から，二回目は柄の部分から，二回にわけて，小皿Ⅱに水を入れる。

シャーラグラーマの二つの石を右手で洗う。

小皿Ⅱの水をボウルにすてる。

小皿Ⅱに洗ったシャーラグラーマの石を

によって神々は祭式を行った，サードゥ達は，聖仙達は。(7)」「プルシャを分解した時，どのくらいの部分に分けたのか。この者の口は何か。両の腕は何。両の腿は何。足は（何と）言われるのか。(11)」

置く。

「この者の口はバラモンとなった。両の腕は王族とされた。庶民なるものはこの者の両の腿。両の足からシュードラは生まれた。(12)」「月は心から生まれた。目から太陽が生まれた。耳から風が，息が。口から火が生まれた。(13)」「へそから虚空が生じた。頭から天が展開した。両の足から大地が，さまざまな方位が耳から。そのように彼等は諸世界を整えた。(14)」

右手に持ったホラ貝で，小皿IIに再び水をたっぷりかける。

「プルシャを供物として神々が祭式を行った時，それのバターは春になった。薪は夏に，供物は秋に。(6)」「それの囲い木は七つであった。薪は三七作られた。神々は祭式を行う時，プルシャを犠牲獣として繋いだ。(15)」「神々は祭式で祭式を行った。それが最初のダルマとなった。それら大いなるもの達は天界に集まった。そこではかつてのサードゥ達が神々として居る。(16)」[89]「オーム。それは真実。

ホラ貝に水を補給してもとの場所に戻す。

右手に持ったさじの柄の部分から小皿IIに水をかける。

右手に持ったホラ貝で，水を小皿IIにか

89) oṃ sahásraśīrṣā púruṣaḥ sahasrākṣáḥ sahásrapāt /
sá bhūmiṃ viśváto vṛtvā́ty atiṣṭhad daśāṅgulám //1//
púruṣa evédáṃ sárvaṃ yád bhūtáṃ yác ca bhávyam /
utā́mṛtatvásyéśāno yád ánnenātiróhati //2//
etā́vān asya mahimā́to jyā́yāṃś ca pūruṣaḥ /
pā́do 'sya víśvā bhūtā́ni tripā́d asyāmṛ́taṃ diví //3//
tripā́d ūrdhvá úd ait púruṣaḥ pā́do 'syehā́bhavat púnaḥ /
táto víṣvañ vy àkrāmat sāśanānaśané abhí //4//
tásmād virā́ḷ ajāyata virā́jo ádhi pūruṣaḥ /
sá jātó áty aricyata paścā́d bhūmim átho purā́ḥ //5//
tásmād yajñā́t sarvahútaḥ sáṃbhṛtaṃ pṛṣadājyám /
paśū́n tā́ṃś cakre vāyavyā́n āraṇyā́n grāmyā́ś ca yé //8//

↗

それは真実。それは真実。」[90]	ける。水を補給せずにホラ貝をもとの場所に戻す。

III-3-b　おそなえ

第三十九のマントラ (*cf.* p. 21, 1.14–p. 22, 1.2)

「これは足洗い水。 オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。 オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。 オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。	左手でカネを鳴らしながら，右手のさじで二回小皿IIに水を入れる。
これは足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水。 オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。	左手でカネをならしながら，右手のホラ貝で一回小皿IIに水を入れる。
これは沐浴水，再び口濯ぎ水。	左手でカネを鳴らしながら，右手のさじ

↘ tásmād yajñát sarvahúta ṛ́caḥ sā́māni jajñire /
chándāṃsi jajñire tásmād yájus tásmād ajāyata //9//
tásmād áśvā ajāyanta yé ké cobhayádataḥ /
gā́vo ha jajñire tásmāt tásmāj jātā́ ajāváyaḥ // 10
tā́ṃ yajñáṃ barhíṣi praúkṣan púruṣaṃ jātám agratáḥ /
téna devā́ ayajanta sādhyā́ ṛ́ṣayaś ca yé //7//
yát púruṣaṃ vy ádadhuḥ katidhā́ vy àkalpayan /
múkhaṃ kím asya kaú bāhū́ kā́ ūrū́ pádā ucyete /11//
brāhmaṇò 'sya múkham āsīd bāhū́ rājanyàḥ kṛtáḥ /
ūrū́ tád asya yád vaíśyaḥ padbhyā́ṃ śūdró ajāyata //12//
candrámā mánaso jātáś cákṣoḥ sū́ryo ajāyata /
múkhād índraś cāgníś ca prāṇā́d vāyúr ajāyata //13//
nā́bhyā āsīd antárikṣaṃ śīrṣṇó dyaúḥ sám avartata /
padbhyā́ṃ bhū́mir díśaḥ śrótrāt táthā lokā́n akalpayan //14//
yát púruṣeṇa havíṣā devā́ yajñám átanvata/
vasantó asyāsīd ā́jyaṃ grīṣmá idhmáḥ śarád dhavíḥ //6//
saptā́syāsan paridháyas tríḥ saptá samídhaḥ kṛtáḥ /
devā́ yád yajñáṃ tanvānā́ ábadhnan púruṣaṃ paśúm //15//
yajñéna yajñám ayajanta devā́s tā́ni dhármāṇi prathamā́ny āsan /
té ha nā́kaṃ mahimā́naḥ sacanta yátra pū́rve sādhyā́ḥ sánti devā́ḥ //16//

これは「原人の歌」(Puruṣasūkta) で知られている ṚV 10, 90, 1–16 のテキストの全文である。第六番目のマントラと第七番目のマントラの順序が本来のテキストの順序とは異なって唱えられている。今手元にミティラー地方用の礼拝のパンフレットが五種類あるが，この五種類のすべてが，今挙げた，本来の順序とは異なる順序を示している。ベンガル地方の例を教えるという Vidyārṇava [1918: 128–134] は，ミティラー地方のとは異なり本来の順序を示している。他の地方の例を知らないので即断はできないが，この順序はミティラー地方でかなり早くから定着していたのではないかと思われる。この「原人の歌」とヴィシュヌとの密接な関係に関して [Gonda 1975: 137] を参照されたい。また Tachikawa が報告する ṣoḍaśa-upacāra-pūjā「十六のおもてなしからなるプージャー」の個々のおもてなしは，それぞれ十六詩節からなるこの「原人の歌」の個々の詩節と対応している [Tachikawa 1983: 108–109, 137–159]。しかし，そのプージャーの対象となる神格 Caturśṛṅgi はヴィシュヌと関係のない神格である。

90) oṃ tat sat / oṃ tat sat / oṃ tat sat //

オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。これはビャクダンの塗りもの。

オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。これはビャクダンの神々しい，芳香に満ちたよき塗りもの，……(?)。最高の神よ，それぞれ汝に嘉納されよ。これはビャクダンの塗りもの。

オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。これは赤いビャクダン。

オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。これは赤いビャクダンの塗りもの。

オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。これは花。

オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。これは花。

オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。これは花。

オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。」[91)]

で三回小皿IIに水を入れる。

右手で二つのシャーラグラーマの石のそれぞれに一回ずつすったビャクダンを塗る。

右手で二つのシャーラグラーマの石のそれぞれに一回ずつすった赤いビャクダンを塗る。

右手で小皿IIに三回にわけて花を置く。

第四十のマントラ

「オーム。汝はヴィシュヌの額なり。汝らはヴィシュヌの両の口もとなり。汝はヴィシュヌの紐なり。汝はヴィシュヌの

ていねいにすったビャクダンを塗ったトゥルシーの葉を四枚右手で取り，左手に置き，右手に持ち替えて，

91) idaṃ pādyam / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
etāni pādyārghācamanīyasnānīyapunarācamanīyāni /
oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
idaṃ snānīyapunarācamanīyam /
oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
idaṃ śrīkhaṇḍacandanaṃ lepanam / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
idaṃ śrīkhaṇḍacandanaṃ divyaṃ gandhāḍhyaṃ sulepanaṃ navilepanam /
suraśreṣṭha pṛthak te pratigṛhyatām /
idaṃ śrīkhaṇḍacandanam / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
idaṃ raktacandanam / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
idaṃ raktacandanaṃ lepanam / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ //

不動のものなり。汝はヴィシュヌ的なものなり。ヴィシュヌに対して汝を。」[92)]

第四十一のマントラ

「これはお気に入りのトゥルシーの葉。オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。	と唱えて，小皿IIに置く。
これはそれぞれ香，花，供物。オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。	左手でカネを鳴らしながら，右手のホラ貝で小皿IIに水をかける。
これは口濯ぎ水。オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。	ホラ貝で水を少しボウルにすてる。
花を手にした合掌一回。オーム。世尊，聖なるヴィシュヌに頂礼。」[93)]	花びらを両手にのせ小皿IIに置く。両手を額のところにもっていき，合掌する。

III-4　ナルマデーシュヴァラナータへのプージャー (narmadeśvaranātha)

第四十二のマントラ

「これは足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，再び口濯ぎ水。オーム。ナルマデーシュヴァラナータに頂礼。	右手に持ったさじの柄の部分から小皿IIに水を入れる。
これは沐浴水，再び口濯ぎ水。オーム。ナルマデーシュヴァラナータに頂礼。	同じ動作で，小皿IIに水を入れる。
これはビャクダンの塗りもの。オーム。ナルマデーシュヴァラナータに頂礼。	右手ですったビャクダンを小皿IIに置く。

92) oṃ víṣṇo raráṭam asi / víṣṇoḥ śnáptre stho / víṣṇoḥ syūr asi /
víṣṇor dhurvám asi / vaiṣṇavám asi víṣṇave tvā //
cf. TS 1, 2, 13, 3. Taittirīya Saṃhitā では víṣṇo raráṭam asi の後に víṣṇoḥ pṛṣṭhám asi「汝はヴィシュヌの背中なり」の部分がさらにある。このマントラはヴェーダ祭式においては，ソーマ祭の時，「供物置きの小屋」havirdhānaśālā の前面の垂木を固定する際に用いられている [Caland and Henry 1906: 89]。

93) etāni svacchandanatulasīpatrāṇi / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
etāni yathābhāgagandhapuṣpanaivedyāni / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
idam ācamanīyam / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ /
ekapuṣpāñjaliḥ / oṃ bhagavate śrīviṣṇave namaḥ //

これは赤いビャクダンの塗りもの。 オーム。ナルマデーシュヴァラナータに頂礼。	赤いビャクダンを小皿IIに置く。
これは米。 オーム。ナルマデーシュヴァラナータに頂礼。	米を小皿IIに置く。
これは花。 オーム。ナルマデーシュヴァラナータに頂礼。	花を小皿IIに置く。
これはそれぞれ香，花，供物。 オーム。ナルマデーシュヴァラナータに頂礼。	左手でカネを鳴らしながら，右手のさじで小皿IIに水をかける。
これは口濯ぎ水。 オーム。ナルマデーシュヴァラナータに頂礼。	右手のさじで水を一回小皿IIにかける。
花を手にした合掌一回。 オーム。ナルマデーシュヴァラナータに頂礼。」[94]	花びらを両手にのせ小皿IIに置く。
	今まで左のわきの方に置いていたルドラアクシャの首飾り[95]を取りだして，二重にして首にかける。

III-5　ラクシュミーへのプージャー (lakṣmī)

第四十三のマントラ

「オーム。ブール，ブヴァハ，スヴァハ。ラクシュミーよ，ここに来たれ，ここに立て。

94) これ以降の神々へのプージャーのマントラは基本的に注88で紹介した五人の神々へのマントラと同一であるので，テキストを挙げるのはやめる。

95) rudrākṣamālā. ルドラ・アクシャ (skt. rudrākṣa, maithilī, rudrācch「ルドラの目」) はアオイ目，ホルトの木科の和名ジュズボダイジュ (Elaeocarpus Ganitrus) の硬い木の実で，それから作った首飾り [Grierson 1885: 151, no. 755; Gonda 1963b: 286]。ルドラ・アクシャの首飾りに関しては [Kirfel 1949] を参照されたい。さらに [Padoux 1987; Mani 1975: 655] を見られたい。なおルドラ・アクシャの和名に関しては第四研究部の山本助教授に教えを受けた。

この後，(1)足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水，(2)沐浴水，再び口濯ぎ水，(3)ビャクダンの塗りもの，(4)赤いビャクダンの塗りもの，(5)鉛丹の紅[96]，(6)米，(7)花，(8)香，花，供物，(9)口濯ぎ水，(10)花を手にした合掌一回，(11)口濯ぎ水の順序で小皿Ⅲにお供えをしていく。

Ⅲ-6　サラスヴァティーへのプージャー (sarasvatī)

第四十四のマントラ

サラスヴァティーを招き，同じ順序で小皿Ⅳにお供えをしていく。

Ⅲ-7　ドゥルガーへのプージャー (durgā)

第四十五のマントラ

ドゥルガーを招き，同じ順序で小皿Ⅴにお供えをしていく。

Ⅲ-8　ブヴァネーシュヴァリーへのプージャー (bhuvaneśvarī)

第四十六のマントラ

ブヴァネーシュヴァリーを招き，同じ順序で小皿Ⅵにお供えをしていく。

赤い手袋[97]を右手に着け，黙想する（約1分40秒）（写真27）。

手袋をぬぎ，右手のさじで水を一回六つの小皿の上にかける。

額の前で両手を合わせておじぎをする。

右手のカガミを六つの小皿の上にかざす。

右回りに二回，頭の回りにカガミを回す。

カガミを見て，今一度額の三本の灰の線を整える。カネを鳴らしながら，人差指と中指の間に花をはさみ，小皿の上にかざす。

96) sindūravarṇa. 既婚女性の印として，左右に分けられた髪の付根あたりに付けられる赤い色。結婚式でこの鉛丹の紅をはじめて付ける儀礼が行われる [Grierson 1885: 369; Pandey 1969: 220]。以下の女神はすべて既婚の女性とみなされ，御供にこの鉛丹の紅が加えられている。

97) この赤い手袋は jhorā といわれ，その中に aṭhotrī と呼ばれる珠数がはいっている [Grierson 1885: 157]。この間彼は彼のグルから伝えられた彼の個人的に崇拝する神 (iṣṭadevatā) に対するマントラを唱えるという。このマントラは他人に教えてはならないということで，いかなるマントラを唱えたかは不明である。

額の前で両手を合わせておじぎをする。右手のさじで水を一回六つの小皿の上にかける。

Ⅲ-9　おゆるし

第四十七のマントラ

「オーム。お迎えを私は知らない。お別れを私は知らない。礼拝をさらに私は知らない。お許し下さい，最高の女主宰者よ。」[98)]

「マントラに関して不備な，行為に関して不備な，献身の情に関して不備な礼拝を，聖なる女主宰者よ，私は行った。女神よ，私のそれが完全に満たされたものになりますように。」[99)]

Ⅲ-10家の神[100)]へのプージャー

さじ，銅の小さな容器，カネ，花入れ，供え物入れを手にして，家の中にはいっていく。

---

98) oṃ āvāhanaṃ na jānāmi na jānāmi visarjanam /
pūjāṃ caiva na jānāmi kṣamasva parameśvari // [Bühnemann 1988: 179] を参照。

99) oṃ mantrahīnaṃ kriyāhīnaṃ bhaktihīnaṃ śrīśvari /
yat pūjitaṃ mayā devi paripūrṇaṃ tad astu me // [Bühnemann 1988: 179] を参照。

100) 家の神として三人の女神が崇められる。つまり，1. トゥリプラの美しい女，五人の姉妹をもつ女神ダクシナカーリー (dakṣiṇakālī), 2. シータラー (śitalā), 3. ヴィシャハリー (viṣahari) の三人である。この時点まで礼拝されてきた神々，そして，これら三人の家の神の後で更に礼拝される神々は，おおまかにいって，ヒンドゥー教に関するサンスクリット文献によく登場する神々と呼んでよいであろう。家の神のうち第一の女神ダクシナカーリーはタントラ的な女神と分類されうる[Goodriaan and Gupta 1981]。それに対して，残りの二人の女神は広い意味でのベンガル文化圏の女神といえるであろう。つまり，シータラーは南インドの Māriammam に対応する，ベンガル地方の天然痘の女神であり [Haussig 1984: 161–162]，ヴィシャハリーはやはりベンガル文化圏に特有な蛇の女神 Manasā の一つの名前である [Smith 1980: 16]。このマハーデーヴァ・プージャーはヴェーダの宗教に源を発する saṃdhyā-upāsana とヒンドゥー的なプージャーが結合したものであり，このプージャーにおいてヴィシュヌもシヴァと同様，礼拝の対象となっている。さらに家の神としてタントラ的な神格とベンガル文化圏という地域に特有な神格が崇められ，まさに総合的な性格を呈している。

III-10-a　ダクシナカーリーへのプージャー (dakṣiṇakālī)

第四十八のマントラ

お招きのマントラなしで，「トゥリプラの美しい女，世尊，五人の姉妹をもつ女神ダクシナカーリー」に(1)足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水，(2)沐浴水，再び口濯ぎ水，(3)鉛丹の紅，(4)ビャクダンの塗りもの，(5)赤いビャクダンの塗りもの，(6)米，(7)花，(8)香，花，供物，(9)花を手にした合掌一回，(10)口濯ぎ水の順序でお供えをする。

III-10-b　シータラーへのプージャー (śītalā)

第四十九のマントラ

同じ順序で，女神シータラーにお供えをする。

III-10-c　ヴィシャハリーへのプージャー (viṣaharī)

第五十のマントラ

同じ順序で「毒を取り去る女神」にお供えをする。

Ⅲ-11　おゆるし

第五十一のマントラ

「オーム。何千という過ちを昼，夜私は犯す。この者は従者と私のことをお考えになり，お許し下さい，最高の女主宰者よ。」[101]「お迎えを私は知らない。お別れを私は知らない。礼拝をさらに私は知らない。お許し下さい，最高の女主宰者よ。」「マントラに関して不備な，行為に関して不備な，献身の情に関して不備な礼拝を，聖なる女主宰者よ，私は行った。女神よ，私のそれが完全に満たされたものになりますように。」[102]

道具一式を持って家の中から出てきて，中庭の北東の隅にあるトゥルシーの木の所に行く（写真28）。

101) oṃ aparādhasahasrāṇi kriyante 'harniśaṃ mayā /
dāso 'yam iti māṃ matvā kṣamasva parameśvari // [BÜHNEMANN 1988: 179] を参照。
102) 注98と注99を参照。

Ⅲ-12　ハヌマーンへのプージャー (hanumān)

第五十二のマントラ

トゥルシーの木の根もとのところで，お招きのマントラなしで，「ラーマの，大いなる力をもつハヌマーン」に(1)足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水，(2)ビャクダンの塗りもの，(3)赤いビャクダンの塗りもの，(4)米，(5)花，(6)香，花，供物，(7)口濯ぎ水，(8)花を手にした合掌一回，(9)口濯ぎ水の順序でお供えをする。

Ⅲ-13　トゥルシーの木へのプージャー (tulasīvṛkṣa)

第五十三のマントラ

同じくお招きのマントラなしで，「トゥルシーの木」に，同じ順序でお供えをする。

お供えの後，左手でカネを鳴らしながら，右手に持った線香をかざしながらトゥルシーの木の礼拝をする。

再びもとの座に戻り，座り，祭具一式を整える。

Ⅲ-14　キールティムカへのプージャー (kīrtimukha)[103)]

第五十四のマントラ

「オーム。キールティムカよ，ここに来たれ，ここに立て。」

大きい水壺からギラースに移した水の一部を銅の容器に移す。キールティムカの像を大きな皿の上に置く。

この後，(1)足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水，(2)沐浴水，再び口濯ぎ水，(3)足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水，(4)ビャクダンの塗りもの，(5)赤いビャクダンの塗りもの，(6)米，(7)花，(8)香，花，供物，(9)口濯ぎ水，(10)花を手にした合掌一回，(11)口濯ぎ水の順序でお供えをする。

---

103) kīrtimukha. キールティムカは「誉の顔」の意味で，顔だけからなる神的存在。この地方の伝承では，シヴァのプージャーの前に必ずこのキールティムカのプージャーを行うべしとされる。どのようにしてこのキールティムカが顔だけの存在になったのか，また何故シヴァのプージャーの前でこの者のプージャーを行わなければならないのかに関するプラーナの伝承に関して [永ノ尾　1989] を参照。

Ⅲ-15　シヴァへのプージャー (śiva)

III-15-a　おまねき (āvāhana)

第五十五のマントラ (p. 22, 1.10–11)

「オーム。ハラに対して頂礼。オーム。大いなる主宰者に対して頂礼。オーム。鉾を手にする者に対して頂礼。オーム。鉾を手にする者よ，ここにしっかりと立て。」[104)]

今まで木の台の上に横たわっていたリンガを一つ右手で取って，リンガの先にビャクダンのすり器の上の米を一つつけて，大きな皿の上に立てる。左手を広げて，前のところで隠すように覆う（写真29)。

第五十五のマントラを十一回繰り返し，十一個のリンガを大きな皿の上にすべて立てる。

その後，ビャクダンすり器の上の米を右手でつかみ，立てられたリンガの上にまき，右手に持ったさじの先の方から三回に分けて水をかける。一回合掌し，花カゴから花を取り，リンガの上にまく。

III-15-b　観想 (dhyāna)

第五十六のマントラ (p. 22, 1.16–p. 23, 1.1)

「オーム。常に大いなる主宰者を瞑想すべし，銀の山の輝きをもち，愛らしい月を髪飾りとし，宝石の飾りで体が輝き，斧と．．．．を手にし，心静かな者，ハスに座り，神々の群れにまわりから称えられ，トラの皮を身にまとっている者，一切の始めで，一切の種で，恐れを残りなく取り去ってくれる者，五つの顔をもち，三つの目をもつ者を。」

「瞑想の花一つ。」[105)]

花カゴから花を一つ取り，両手で持ち，その両手を軽く広げて，両足の間に置き，このマントラを唱える。

---

104) oṃ harāya namaḥ / oṃ maheśvarāya namaḥ / oṃ śūlapāṇaye namaḥ / oṃ śūlapāṇe iha supratiṣṭhito bhava //

こう唱えて，両手の中の花をリンガの上にうやうやしく置く。

III-15-c　おそなえ

第五十七のマントラ (*cf.* p. 23, 1.3–14)

「オーム。弓を持つものに頂礼。オーム。弓を待つものよ，ここに来たれ，ここに立て[106]。

ビャクダンすり器の上の米を右手で取って，リンガの上にまく。

オーム。獣の主に頂礼。これは足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水。オーム。獣の主に頂礼。

右手に持ったさじの先の方からリンガの上に十三回に分けて，水をまく。

これは足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水。オーム。獣の主に頂礼。

これは足洗い水，敬い水，口濯ぎ水，沐浴水，再び口濯ぎ水。オーム。獣の主に頂礼。

オーム。頂礼。シヴァに頂礼。これは沐浴水，再び口濯ぎ水。

オーム。頂礼。シヴァに頂礼。これは沐浴水，再び口濯ぎ水。

オーム。頂礼。シヴァに頂礼。これは沐浴水，再び口濯ぎ水。

オーム。頂礼。シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

これはビャクダンの塗りもの。オーム。シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

小さな木の棒でビャクダン入れからビャクダンを少し取り，リンガの先の部分に一つ一つつけていく。

これはビャクダンの塗りもの。オーム。シヴァに，シヴァに頂礼。

105) oṃ dhyāyen nityaṃ maheśaṃ rajatagirinibhaṃ cārucandrāvataṃsaṃ ratnākalpojjvalāṅgaṃ paraśumṛgavarābhītihastaṃ prasannam / padmāsīnaṃ samantāt stutam amaragaṇair vyāghrakṛttiṃ vasānaṃ viśvādyaṃ viśvabījaṃ nikhalabhayaharaṃ pañcavaktraṃ trinetram // ekadhyānapuṣpam //

106) oṃ pinākadhṛje namaḥ / oṃ pinākadhṛg ihāgaccha / iha tiṣṭha //

これはビャクダンの塗りもの。オーム。シヴァに，シヴァに頂礼。

これはビャクダンの塗りもの。オーム。シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

これは赤いビャクダンの塗りもの。オーム。シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

小さな木の棒で赤いビャクダン入れから赤いビャクダンを少し取り，リンガの先の部分に一つ一つつけていく。

これは赤いビャクダンの塗りもの。オーム。シヴァに，シヴァに頂礼。

これは赤いビャクダンの塗りもの。オーム。シヴァに頂礼。

これは赤いビャクダンの塗りもの。オーム。シヴァに頂礼。

これは米，オーム。シヴァに，シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

右手でビャクダンすり器の上の米をつまみ，リンガの上にまく。

これは米。オーム。シヴァに，シヴァに頂礼。

これは米。オーム。シヴァに頂礼。

これは花。オーム。シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

一つ一つのリンガの上に花を一つずつのせていく。

これは花。オーム。シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

これは花。オーム。シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

これは花。オーム。シヴァに頂礼。

これは花。オーム。シヴァに，シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

これは花。オーム。シヴァに，シヴァに頂礼。

これは花。オーム。シヴァに，シヴァに，シヴァに頂礼。

これはそれぞれ香，花，供物。オーム。

左手でカネを鳴らしながら，右手のさじ

祝福をもたらすシヴァに頂礼。	で水を二回かける。
これは口濯ぎ水。オーム。祝福をもたらすシヴァに頂礼。	水を一回ボウルにすてる。
花を手にした合掌一回。オーム。祝福をもたらすシヴァに頂礼。	両手に花をのせリンガの上に置く。
これは口濯ぎ水。オーム。祝福をもたらすシヴァに頂礼。」[107]	水を一回ボウルにすてる。

III-15-d　礼拝 (upasthāna)

第五十八のマントラ (p. 23, 1.17–p. 24, 1.2)

「オーム。大地を身体とするシャルヴァに頂礼。オーム。水を身体とするバヴァに頂礼。オーム。火を身体とするルドラ	小皿Ⅰの米を右手に取って，「頂礼」と唱える毎に少しずつリンガの上にまく。

107) oṃ paśupataye namaḥ / etāni pādyārghācamaniyasnāniyapunarācamaniyāni /
oṃ paśupataye namaḥ /
etāni pādyārghācamaniyasnāniyapunarācamaniyāni / oṃ paśupataye namaḥ /
etāni pādyārghācamaniyasnāniyapunarācamaniyāni / oṃ paśupataye namaḥ /
oṃ namaś śivāya namaḥ / idaṃ snāniyapunarācamaniyam /
oṃ namaś śivāya namaḥ / idaṃ snāniyapunarācamaniyam /
oṃ namaś śivāya namaḥ / idaṃ snāniyapunarācamaniyam /
oṃ namaś śivāya śivāya śivāya śivāya namaḥ /
idaṃ śrīkhaṇḍacandanaṃ lepanam / oṃ śivāya śivāya śivāya namaḥ /
idaṃ śrīkhaṇḍacandanaṃ lepanam / oṃ śivāya śivāya namaḥ /
idaṃ śrīkhaṇḍacandanaṃ lepanam / oṃ śivāya śivāya namaḥ /
idaṃ śrīkhaṇḍacandanaṃ lepanam / oṃ śivāya śivāya namaḥ /
idaṃ śrīkhaṇḍacandanaṃ lepanam / oṃ śivāya śivāya śivāya namaḥ /
idaṃ raktacandanaṃ lepanam / oṃ śivāya śivāya śivāya namaḥ /
idaṃ raktacandanaṃ lepanam / oṃ śivāya śivāya namaḥ /
idaṃ raktacandanaṃ lepanam / oṃ śivāya namaḥ /
idaṃ raktacandanaṃ lepanam / oṃ śivāya namaḥ /
idam akṣatam / oṃ śivāya śivāya śivāya śivāya namaḥ /
idam akṣatam / oṃ śivāya śivāya namaḥ /
idam akṣatam / oṃ śivāya namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ śivāya śivāya śivāya namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ śivāya śivāya śivāya namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ śivāya śivāya śivāya namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ śivāya namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ śivāya śivāya śivāya śivāya namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ śivāya śivāya namaḥ /
etāni puṣpāni / oṃ śivāya śivāya śivāya namaḥ /
etāni yathābhāgagandhapuṣpanaivedyāni / oṃ śaṃbhuśivāya namaḥ /
idam ācamaniyam / oṃ śaṃbhuśaṃbhuśivāya namaḥ /
ekapuṣpāñjaliḥ / oṃ śaṃbhusivāya namaḥ /
idam ācamaniyam / oṃ śaṃbhuśivāya namaḥ //

に頂礼。オーム。風を身体とするウグラに頂礼。オーム。虚空を身体とするビーマに頂礼。オーム。祭主を身体とするパシュパティに頂礼。オーム。ソーマを身体とするマハーデーヴァに頂礼。オーム。太陽を身体とするイーシャーナに頂礼。」[108)]

第五十九のマントラ

「ハラよ，ハラよ，大いなる神よ，祝福をもたらすものよ，バン，バン，バン，バン。．．．，．．．，主よ，空衣のものよ，信者に為になることをするものよ，三叉の鉾を持つものよ，旗を持つものよ，巻き上げ髪を持つものよ，．．．，．．．，．．．，．．．，トゥリプラの敵よ，．．．，主よ。」[109)]

右手のさじで二回リンガの上に水をまく。「バン，バン」と唱えて，額の前で合掌する。

今まで首に掛けていたルドラ・アクシャの首飾りを右手に持って，胸の前にささげて，アクシャを一つ一つ数えながら瞑想する（写真30）。終わると，首飾りを首に掛け，右手のさじでリンガの上に水を一回かける。

花カゴから花を一つ取り，ビャクダン，赤いビャクダン，ビャクダンすり器の上の米をつかみ，その花に左手で持ったさじで水を一回かけ，

108) oṃ śarvāya kṣitimūrtaye namaḥ / oṃ bhavāya jalamūrtaye namaḥ /
oṃ rudrāyāgnimūrtaye namaḥ / oṃ ugrāya vāyumūrtaye namaḥ /
oṃ bhīmāyākāśamūrtaye namaḥ / oṃ paśupataye yajamānamūrtaye namaḥ /
oṃ mahādevāya oṃ somamūrtaye namaḥ / oṃ īśānāya oṃ sūryamūrtaye namaḥ /

109) hara hara mahādeva śaṃbho バン バン バン バン
dohāi bholā nātha digambara bhaktahitakārī triśūladhārī
dhvajadhārī jaṭādhārī pakṣakepahārī lājase ubārī
bholā tripurārī dohāi nātha //
これは古いマイティリー語によるマントラであるという。サンスクリット語から類推できる部分もあるが，多くの部分は意味を聞き取れなかった。

Ⅲ-16　ブラフマン神へのプージャー (brahmā)

第六十のマントラ (*cf.* p. 24, 1.4)

「オーム。ブラフマンに頂礼。	こう唱えて，その花を右手前に置く。
これはそれぞれ供物。オーム。ブラフマンに頂礼。	左手でカネを鳴らしながら，右手のさじで水を一回その花の上にまく。
これは口濯ぎ水。オーム。ブラフマンに頂礼。	右手のさじで一回ボウルに水をすてる。
花を手にした合掌一回。オーム。ブラフマンに頂礼。	両手で花をささげる。
これは口濯ぎ水。オーム。ブラフマンに頂礼。」[110]	右手のさじで一回ボウルに水をすてる。一回合掌する。

Ⅲ-17　シヴァ，ヴァースデーヴァ，ゴーヴィンダへの頂礼 (śiva, vāsudeva, govinda)

第六十一のマントラ

「オーム。頂礼。シヴァに，静かな姿をした世尊ヴァースデーヴァに，ゴーヴィンダに頂礼。頂礼。」[111]	右手にカガミを持ち，リンガの上にかざす。頭の回りに一回カガミを回し，前でカガミを見る。

Ⅲ-18　おゆるし

第六十二のマントラ

「オーム。手足で犯した罪，言葉と身体から生じた罪，行為より生じた罪，耳と目より生じた罪，あるいは心の罪，定められているものであれ，定められていないものであれ，すべての罪をお許し下さい。勝利せよ，勝利せよ，慈悲の大海，聖なる大いなる神，祝福をもたらすもの	合掌してこのマントラを唱える。

110) oṃ brahmaṇe namaḥ / idaṃ yathābhāganaivedyam / brahmaṇe namaḥ / idam ācamanīyam / brahmaṇe namaḥ / ekapuṣpāñjaliḥ / oṃ brahmaṇe namaḥ / idam ācamanīyam / oṃ brahmaṇe namaḥ //

111) oṃ namaś śivāya śāntākārāya bhagavate vāsudevāya govindāya namo namaḥ //

よ。」[112)]

「樟脳のように白く，慈悲の権化で，この世の精髄，蛇の王を巻きつけているもの，常に心臓の中のハスの花に住むバヴァにバヴァーニー共々頂礼します。」[113)]

「大地で足つまづく者達にとって，大地こそが．．．．。あなたに対して罪を犯した者達にとって，あなたこそが拠所です。主よ。」[114)]

「荼毘の灰を塗り，方位を衣とし，巻き上げ髪をし，首に蛇の主を巻きつける獣の主，ドクロを首飾りにする存在物の主は毒を食べ者として食べる。世界の主をただ一人頼る（汝を）愛する。バヴァーニよ，汝をめとった一連の儀式のこれが果報。」[115)]

第六十三のマントラ

「オーム。バラモン殺しに相当するようなどんな罪でも，それらは滅びる，右回りに回る度に。」[116)]

右手の人差指と中指で花を一つはさみ，左手でカネを鳴らしながら，祭紐の先を花をはさんだ右手でつかみ，六つの小皿の上で振る（写真31）。

このマントラを四回唱えるあいだ，この行為を続ける。

右手のさじで六つの小皿の上に水をまく。

---

112) karacaraṇakṛtaṃ vākkāyajaṃ karmajaṃ vā
śravaṇanayanajaṃ vā mānasaṃ vāparādham /
vihitam avihitaṃ vā sarvam etat kṣamasva
jaya jaya karuṇābdhe śrīmahādeva śaṃbho //

113) karpūragauraṃ karuṇāvatāraṃ saṃsārasāraṃ bhujagendrahāram /
sadā vasantaṃ hṛdayāravinde bhavaṃ bhavānīsahitaṃ namāmi //

114) bhūmau skhalitapādānāṃ bhūmir eva phalaṃ balam /
tvayi jātāparādhānāṃ tvam eva śaraṇaṃ prabho //

115) citābhasmālepo garalam aśanaṃ dikpaṭadharo
jaṭādhārī kaṇṭhe bhujagapatihārī paśupatiḥ /
kapālī bhūteśo bhajati jagadīśaikapadavīṃ
bhavāni tvatpāṇigrahaṇaparipāṭīphalam idam //

116) 注80を参照。

右手を額の前にして前かがみになって礼拝をする。

Ⅲ-19　プージャーの終了の宣言

III-19-a　太陽をはじめとする五人の神々からキールティムカまで

第六十四のマントラ (*cf.* p. 24, 1.5)

「オーム。太陽をはじめとする五人の神格よ，汝らは崇められた。お許し下さい。お守り下さい。」[117]

右手のさじで水を一回小皿Ⅰにかける。

第六十五のマントラ

「オーム。世尊ヴィシュヌよ，汝は崇められた。お許し下さい。心なごんで下さい。」[118]

ホラ貝を右手に取って，その中の水を小皿Ⅱにかけ，残りを顔にかけ，さらに前の方にすてる。

第六十六のマントラ

「オーム。ナルマデーシュヴァラよ，汝は崇められた。お許し下さい。心なごんで下さい。

オーム。聖なるラクシュミーよ，．．．，汝は崇められた。お許し下さい。

オーム。サラスヴァティーよ，．．．，楽しんで下さい。汝は崇められた。お許し下さい。

オーム。ドゥルガーよ，汝は崇められた。お許し下さい。場所をお守り下さい。

オーム。ブヴァネーシュヴァリーよ，．．．，楽しんで下さい。汝は崇められた。お許し下さい。

オーム。キールティムカよ，汝は崇められた。お許し下さい。場所をお守り下

右手のさじでそれぞれの小皿に水をまく。

117) oṃ sūryādipañcadevatāḥ pūjitāḥ stha kṣamadhvaṃ rakṣata //
118) oṃ bhagavan viṣṇo pūjito 'si kṣamasva prasanno bhava //

さい。」[119]

それぞれの小皿の上に捧げられた花を右手でつかみ，額の前にもっていっては，ボウルにすてる。
小皿IIの中のシャーラ・グラーマの石を一つずつ小さな銅の容器の中の水で洗い，はこに戻す。
カガミを見ながらビャクダンを眉の間に塗る。
はこの石の上に花を入れ，ふたをし，花カゴに納める。

III-19-b　シヴァへのプージャー終了の宣言

第六十七のマントラ

「オーム。ハラよ，ハラよ，大いなる神よ，バン，バン，バン，バン。
時を除くものよ，苦しみを除くものよ，病を除くものよ，憂いを除くものよ，不幸を除くものよ，貧しさを除くものよ。
ハラよ，ハラよ，大いなる神よ，
バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン，バン。
ブルルー。」[120]

右手のさじでリンガに水を四回かける。

左手でカネを鳴らしながら，右手のさじでリンガの上に水をかける。

右手の親指と中指・人差指で頬を押えブルルーという。
左手のさじで右手に水をかけ，右横にそ

119) oṃ narmadeśvara pūjito 'si kṣamasva prasanno bhava /
oṃ śrīlakṣmi rame pūjitāsi kṣamasva /
oṃ sarasvate rame ramasva pūjitāsi kṣamasva /
oṃ durge pūjitāsi kṣamasva sthānaṃ rakṣa /
oṃ bhuvaneśvari rame ramasva pūjitāsi kṣamasva /
kīrtimukha pūjito 'si kṣamasva sthānaṃ rakṣa //

120) oṃ hara hara mahādeva バン バン バン バン
kālahara kaṣṭahara rogahara śokahara
duḥkhahara dāridrahara hara hara mahādeva
バン（十六回）ブルルーー

の水をすてる。

第六十八のマントラ (*cf.* p. 24, 1.8–9)

「オーム。大いなる神よ，汝は崇められた。お許し下さい。場所をお守り下さい。

右手のさじでリンガの上に水を一回かける。

オーム。ブラフマンよ，汝は崇められた。お許し下さい。場所をお守り下さい。」[121)]

右手のさじでブラフマン神の場所に水を一回かける。

Ⅲ-20　チャンディーシュヴァラへの頂礼

第六十九のマントラ (p. 24, 1.11)

「オーム。チャンデーシュヴァラに頂礼。」[122)]

最後に一回合掌する。

右手でリンガのうえの花をつかんで取り，右目，左目，額にあて，ボウルにすてる。

右手でリンガの上の花を少し取り，頭にあて，ボウルにすてる。この動作を二回繰り返す。

ブラフマンへの花を右手で取り，頭にあてて，ボウルにすてる。

大きな皿の上のリンガを一つずつ倒していく。一つのリンガのさきの部分からビャクダンを右手の薬指につけ，カガミを見ながら眉の間につける。銅の容器を左手に取り，残り水で右手を洗う。

Ⅲ-21　祖霊達へのプージャーの終了の宣言

ルドラ・アクシャの首飾りをはずし，祭紐を右肩から左脇に掛け，水を右手のさじに入れ，後向になり，

第七十のマントラ

「オーム。今日バーラドヴァージャ出自

右手のさじの柄の部分から水を地面にこ

121) oṃ mahādeva pūjito 'si kṣamasva sthānaṃ rakṣa /
oṃ brahman pūjito 'si kṣamasva sthānaṃ rakṣa / oṃ //

122) oṃ caṇḍeśvarāya namaḥ //

の父よ，祖父よ，曽祖父よ，バガヴァット・シャルマン達よ，汝等は崇められた。	ぼす。
「オーム。今日，カーシュヤパ出自の母方の祖父よ，曽祖父よ，曽祖父の父よ，バガヴァット・シャルマン達よ，汝等は崇められた。」[123]	右手のさじの柄の部分から水を地面にこぼす。 祭紐を元のように左肩から右脇に掛ける。
Ⅲ-22　終了	
	ていねいにビャクダンを塗ったトゥルシーの葉を一枚取って，水を入れたさじにのせ，右手で持って，その水を飲み，残りを頭にかけ，トゥルシーの葉を食べる。その後，もう一回水を飲み，頭にかける。 小ⅢⅡとⅢの水をそれぞれ一回ずつ右手のさじに入れ，飲み，頭にかける。小ⅢⅠ-Ⅲの残りをボウルにすてる。小ⅢⅣ-Ⅴの水を右手のさじですくい，近くで見ていた二人の孫に与える。その二人に準備したバナナを少し与え，残りのバナナを自分で食べる。

お　わ　り　に

saṃdhyā-upāsana に関して

saṃdhyā-upāsana が最初に規定されるのはヴェーダ文献の中の Gṛhyasūtra においてである。そこでは，ヴェーダを学ぶ学生 (brahmacārin) の日々の義務の一環として，最も単純な形では，朝夕，太陽に向かって gāyatrī または sāvitrī といわれる

123) oṃ adya bhāradvājagotrāḥ pitāpitāmahaprapitāmahā bhagavaccharmāṇaḥ pūjitāḥ stha / oṃ adya kāśyapagotrā mātāmahapramātāmahavṛddhapramātāmahā bhagavaccharmāṇaḥ pūjitāḥ stha //

マントラを唱えることが saṃdhyā-upāsana であった[124]。その Gṛhyasūtra の時代から約2000年後の現代に行われている saṃdhyā-upāsana は本論のⅡ朝の勤行のところで報告したように，かなり複雑な儀礼に「成長」している。最も単純な形を伝える Kāṭhaka Gṛhyasūtra から現在行われている儀礼のテキストが形作られるまでに，文献史的にみて，Gṛhyasūtra, Dharmasūtra, Dharmaśāstra, Purāṇa, Dharmanibandha など，いくつかの層のテキストを経て来ている。そして，それぞれの層のテキストは，さまざまな「成長」段階の saṃdhyā-upāsana の形を伝えている。さらに，同一の層に属するテキストの間にも，「成長」段階に関して異動が見られる。

この事実を，現代における調査観察という視点から見ると次のように言え換えることができると思う。現在インドで行われている，主としてバラモン達の儀礼を我々は現地で見ることができる。しかし，現在我々が目にするものは，今回報告したマハーデーヴァ・プージャーの場合のように，その背後に2000年近い歴史を背負っているものである。現在という一点に映しだされているその姿は，2000年という歴史が一点に押しつぶされた産物である。現在というスクリーンにどれほど長い歴史が押しつぶされて投影されているかは，個々の事例によって異なってくるであろう。また，現在の姿を理解するということ自身にも，いくつものアプローチの方法があるであろう。しかし，現在のある姿が，歴史的な産物であり，もしその「成長」過程を文献を手掛りにどうにか辿れるとしたら，現在に押しつぶされたかたちを，今一度，歴史の軸にそって，広げてみて，その「成長」過程を分析することは，現在の姿を理解する一つの有効な方法になりうると確信する。

そのような状況を呈する諸文献を追って，saṃdhyā-upāsana の「成長」過程を追う作業はそれ自身かなりな量の仕事となると思われるので，稿を改めて別に行いたい。そこで，今のところは，次の二点を予測的に指摘するだけにとどめておく。先ず第一に，saṃdhyā-upāsana は一番最初の段階では brahmacārin のみに限られた行為であったが，ある段階でヴェーダ学習期の brahmacārin の枠を越えて，現在の事例に見られるように広く家長一般の義務の一つとして拡大して行ったということである。つまり，Dharmaśāstra や Purāṇa の段階で，ヴェーダの学習を終了した者 (snātaka)，そして家長を対象として「日々の義務」(āhnika)，または「正しい行い」(sa-

124) 最も単純な形を伝える Kāṭhaka Gṛhyasūtra 1,25–28 の規定は以下のようである。
sāyaṃ prātaḥ saṃdhyām upāsīta /25/ tiṣṭhet pūrvām /26/ āsītottarām /27/
oṃ bhūr bhuvaḥ svar ity uktvā tat savitur iti sāvitrīm anvāha /28/
「夕べと朝に繋ぎの時間の礼拝を行うべし。前の時（つまり夕方）には立って（行う）べし。後の時（つまり朝）には座って（行う）べし。『オーム。ブール，ブヴァハ，スヴァハ』と唱えた後『そのサヴィトリの』とサーヴィトリー（のマントラ）を唱える。」

dācāra) というものが規定されるようになっていく [KANE 1974: 640–695, 1968: 417; GUPTA 1971: 790–791]。しかし，少なくとも Dharmaśāstra の段階ではなおこの saṃdhyā-upāsana はヴェーダの学習と密接な関係を保持していたように思える[125]。それが Purāṇa 文献の段階でより拡大された形を同時に取りつつ，ヴェーダ学習終了者や家長に課せられるようになっていった。先ず第一に指摘したいのは，この行為者の広がりである。

何故この事実をとりたてて主張するのかというと，一つには，今までの研究でこの簡単な事実を誰一人明言していないからであるが，さらには，この事実が持つと思える文化史的な重要性のゆえにである。ヴェーダの宗教においては Śrauta 的な，そして Gṛhya 的な双方の伝統は，家長に対して朝夕行うべき行為として agnihotra またはそれに類似の儀礼の実行を規定していた。その際，どのような規模を持つものであれ，同じく朝夕行われる saṃdhyā-upāsana はヴェーダ学習の brahmacārin にのみ限定されていたのであるから，両者の間には執行時間に関して何の確執もありえなかった。しかし，この saṃdhyā-upāsana が家長の義務へと拡大されると，そこに一つの確執が生じる。Srinivasan [1973: 167–168] は Kane [1974: 999–1000] に言及しつつ，両者の執行時間に関して確執のあったことは指摘するが，むしろそれを agnihotra というヴェーダの典型的な儀礼と saṃdhyā-upasana との間の本質的な同一性と解釈していく。しかし，筆者はそこで，第二の予測的な指摘とかかわることであるが，この執行者が brahmacārin から家長へと拡大していったという事実を，ヴェーダ的な要素がヒンドゥー的な要素にとって替わられていくという文化史的な現象，つまりヴェーダ文化のヒンドゥー化として解釈できるのではないかと思うのである[126]。

そこで，次に指摘したいのは，その朝の礼拝の「成長」を文献史的に追跡するばあいに考慮すべきテキストに関してである。Gṛhyasūtra をも含めて本来的とされる Dharma文献，つまり Dharmasūtra, Dharmaśāstra が，saṃdhyā-upāsana のテキ

125) Manusmṛti 4, 93 は家長の行うべき saṃdhyā-upāsanaを規定している：
utthāyāvaśyakaṃ kṛtvā kṛtaśaucaḥ samāhitaḥ /
pūrvāṃ saṃdhyāṃ japaṃs tiṣṭhet svakāle cāparāṃ ciram //93//
「起きて，用便をし，清めを行い，心を統一して先の（つまり，朝の）つなぎの時に（ガーヤトリーのマントラを）唱えつつ，立つべし。そして，本来の時に，後の（つまり，夕方のつなぎの時の動行を）長く（行うべし)。」しかし，この規定に続く 4, 95–127 は家長のヴェーダ学習の規定に当てられている。また，Yājñavalkyasmṛti 1, 98 も家長の朝の動行を説くが，1, 99 でヴェーダを学習すべしといい，ヴェーダ学習との関連を保持している。

126) ヴェーダのシュラウタ的な儀礼はヴェーダの時代から連綿と今日まで，一部のバラモン社会において受け継がれてきている。そのシュラウタ儀礼はヴェーダ文献内部においても既にいくつかの変容の跡を示しているが，ヴェーダ期以降，その傾向は著しくなった。シュラウタ儀礼そのものが被った変容としてのヒンドゥー化 (Hinduization) に関して Smith [1987: 32–51] が興味ある議論を伝えている。

ストによる再構成の際に主として考慮に入れられてきたが，それら以外にヴェーダ文献の補遺文献とされるものと，プラーナ文献をもう少し，幅広く考慮に入れていく必要がありそうであるということである。本論で，現在ミティラー地方で行われている朝の礼拝を報告したが，その「成長」した現在の形をはじめて伝えると思われる文献に，ヴェーダ文献の補遺文献とプラーナ文献があった。永ノ尾 [1986: 155] は12世紀，南インドで作られたとされる Śaiva Siddhānta の儀礼書 Śivapratiṣṭhāvidhi に使われているヴェーダ文献に由来するマントラの分析を通じ，ヴェーダ宗教の要素がヒンドゥー教の中に取り込まれていく過程で，ヴェーダ文献の最後期に属する Dharmasūtra や，補遺文献としての Gṛhyaśeṣasūtra が重要な役割を演じていた可能性があることを指摘した。今の場合はヴェーダ的な要素が，ヒンドゥー的な要素にとって替わられていくという過程，つまり，儀礼の面でヒンドゥー的なものが確立していった過程で，ヴェーダの補遺文献がかなり重要な役割を演じ，プラーナ文献がその儀礼のヒンドゥー化を完成していったのではないかという予測をたてる[127]。そして，その予測を，ヴェーダ的な痕跡を残す saṃdhyā-upāsana を含んだマハーデーヴァ・プージャーを文献史的に考察することで確認することができるのではないか，つまり，ひとつのヒンドゥー化のモデルを提出することができるのではないかという期待を予感するわけである。

以上予測的な指摘を行ったが，最後に，かなり詳しく記述したマハーデーヴァ・プージャーの記録の意義の自己申告を行いたい。ヴェーダ文献に見出すことができないマントラを，決して体系的，網羅的ではないが，現時点においてできるかぎりの努力をはらって主としてプラーナ文献に探っていった。そして，今までの研究書で言及されていた以上にプラーナ文献が重要な役割を演じていたという予測の部分的裏付けを与えた。筆者は，本稿を「ミティラー地方の事例報告」と題したが，それは今後の文献を通じた分析のあくまで出発点としたいからである。したがって，本稿にあくまでも今後行うであろう文献的研究の出発点としての意義のみを付与されるなら，筆者として少なくとも本稿に関する限り十分である。

付　記

本稿は，昭和62年度，昭和63年度の文部省科学研究費補助金による海外学術調査「ガンジス河

127) ヴェーダの補遺文献としては Pāraskara Gṛhyasūtra の Kātyāyana 作 Pariśiṣṭaśaucasūtra (Pāraskara Gṛhyasūtra 409–411) を本論で例示したが，このほかに Satyāṣāḍha Gṛhyaśeṣasūtra 1, 2, 1–3, Bodhāyana Gṛhyaśeṣasūtra 4, 6–7, Atharvaveda Pariśiṣṭa 41 そして Karmapradīpa 1, 2 などがある。プラーナ文献としては Viṣṇu Purāṇa 3, 11, Skanda Purāṇa Kāśikhaṇḍa pūrvārdha 35, Garuḍa Purāṇa Pūrvakhaṇḍa 50, Kūrma Purāṇa 2, 18, Devibhāgavata Purāṇa 11, 16, Nārada Purāṇa Pūrvabhāga 20 などを挙げることができる。

流域の複合文化形成動因の比較研究」(代表者・国立民族学博物館長野泰彦・課題番号63041136)から得られた資料に基づいた報告である。なお，昭和63年度から行われている国立民族学博物館の共同研究会「ヒンドゥー的世界観に関する民族学的研究」(代表者・永ノ尾信悟）の成果の一部である。筆者の滞在を快く許してくれたJ村の人々とN村の人々，そして，このプージャーを行ってくれた L. K. Jha 氏に心から感謝をする。

文　　献

BHAT, M. S.

1987 *Vedic Tantrism. A Study of Ṛgvidhāna of Śaunaka with Text and Translation.* Delhi: Motilal Banarsidass.

BLOOMFIELD, Maurice

1906(1964) *A Vedic Concordance.* Harvard Oriental Series 10, Cambaridge, Mass.: Harvard University Press (Delhi: Motilal Banarsidass).

BODEWITZ, H. W.

1976 *The Daily Evening and Morning Offering (Agnihotra). According to the Brāhmaṇas.* Leiden: E. J. Brill.

BÜHNEMANN, Gudrun

1988 *Pūjā. A Study in Smārta Ritual.* Vienna: Gerold & Co.

CALAND, Willem

1910(1968) *Das Vaitānasūtra des Atharvaveda.* (Wiesbaden: Dr. Martin Sändig oHG).

1924(1969) *Das Śrautasūtra des Āpastamba.* Achtes bis fünfzehntes Buch (Wiesbaden: Dr. Martin Sändig oHG).

1928(1969) *Das Śrautasūtra des Āpastamba.* Sechszehntes bis vierundzwanzigstes und einunddreissigstes Buch (Wiesbaden: Dr. Martin Sändig oHG).

CALAND, W. and V. HENRY

1906 *L'agniṣṭoma. Description complète de la forme normale du sacrifice de soma dans le culte védique.* Tome premier. Paris: Ernest Leroux.

CHAKRABARTI, Samiran Chandra

1980 *The Paribhāṣās in the Śrautasūtras.* Calcutta: Sanskrit Pustak Bhandar.

DREYER, Caren

1986 *Das Kāṭhaka-Gṛhya-Sūtra.* Ktitische Edition mit Anmerkungen Teil I. Alt- und Neu-Indische Studien hrsg. vom Seminar für Kultur und Geschichte Indiens an der Universität Hamburg 30, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

DUBOIS, Abbe J. A.

1906(1985) *Hindu Manners, Customs and Ceremonies.* Oxford: Clarendon Press (New Delhi: Asian Educational Services).

永ノ尾信悟

1986 「ヒンドゥー儀礼におけるヴェーダ・マントラの使用について——Śaiva-Siddhāntaの儀礼書 Śivapratiṣṭhāvidhi を例として——」『スリランカと南インドの宗教と文化』国立民族学博物館。

1989 「キールティムカのはなし」『インド思想史研究6巻』服部正明教授退官記念論文集，京都：インド思想史研究会。

EINOO, Shingo

1988 *Die Cāturmāsya oder die Altindischen Tertialopfer.* Monumenta Serindica No. 18. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.

GONDA, Jan

1963a The Indian Mantra. *Oriens* 16: 244–297, Leiden: E. J. Brill.

1963b *Die Religionen Indiens II. Der jüngere Hinduismus.* Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag.

1969 *Aspects of Early Viṣṇuism.* Delhi: Motilal Banarsidass.
1975 *A History of Indian Literature, Vol. I, Fasc. 1, Vedic Literature (Saṃhitās and Brāhmaṇas).* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
1977 *A History of Indian Literature, Vol. II, Fasc. 1, Medieval Religious Literature in Sanskrit.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
1980 *Vedic Ritual. The Non-solemn Rites.* Leiden-Köln: E. J. Brill.

GOUDRIAAN, Teun
1970 Vaikhānasa Daily Worship. According to the handbooks of Atri, Bhṛgu, Kāśyapa, and Marīci. *Indo-Iranian Journal* 12(3): 161–215.

GOUDRIAAN, T. and Sanjukta GUPTA
1981 *A History of Indian Literature, Vol. II, Fasc. 2, Hindu Tantric and Śākta Literature.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

GRIERSON, George A.
1885 *Bihar Peasant Life, being a Discursive Catalogue of the Surroundings of the People of the Province.* Calcutta: The Bengal Secretariat Press.

GUPTA, Anand Swarup
1971 *The Kūrma Purāṇa.* Varanasi: All-India Kashiraj Trust.

HAUSSIG, Hans Wilhelm
1984 *Götter und Mythen des indischen Subkontinents.* Stuttgart: Klett-Cotta.

HAZRA, R. C.
1940(1975) *Studies in the Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs.* Dacca (Delhi: Motilal Banarsidass).

HILLEBRANDT, Alfred
1879(1977) *Das Altindische Neu- und Vollmondsopfer.* Jena: Gustav Fischer (Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt).
1897(1981) *Ritual-Litteratur. Vedische Opfer und Zauber.* Strassburg: K. J. Trubner (Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt).
1929(1965) *Vedische Mythologie.* 2. Band, Breslau: M. & H. Marcus Verlag (Hildesheim: G. Olms Verlagsbuchhandlung).

石井 溥
1988 「具体例へのこだわりと社会単位設定——北ビハールの村で——」『通信』 64: 1–4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

JHA, Makhan
1982 *Civilizational Regions of Mithila & Mahakoshal.* Delhi: Capital Publishing House.

JHA, Ramacandra
1983 *Varṣakṛtya.* Vol. I, Mithilā Granthamālā 20, Varanasi: Chaukhamba Vidyabhavan.

KANE, Pandurang Vaman.
1968 *History of Dharmaśāstra, Vol. I, Part I.* Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
1973 *History of Dharmaśāstra, Vol. IV* (Second Edition). Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
1974 *History of Dharmaśāstra, Vol. II, Part I* (Second Edition). Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
1977 *History of Dharmaśāstra, Vol. V, Part II* (Second Edition). Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

KIRFEL, Willibald
1935 Vom Steinkult in Indien. In: *Studienzur Geschichte und Kultur des Nahen und Fernen Ostens.* Paul Kahle zum 60. Geburtstag. Leiden. (=Willibald Kirfel, Kleine Schriften hrsg. von R. Birwe. 1976. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag. pp. 163–172).
1949 Der Rosenkranz. Ursprung und Ausbreitung. *Beiträge zur Sprach- und Kulturgeschichte des Orients* 1, Walldorf-Hessen.

KOHL-BONN, Joseph
1936 Zum indischen Steinkult. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 90: 432–440.

KRICK, Hertha
1982 *Das Ritual der Feuergründung (Agnyādheya).* Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Sitzungsbericht, 399. Band, Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Südasiens Heft 16, Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.

MAITRA, Asim
1986 *Religious Life of the Brahman (A Case Study of Maithil Brahmans).* New Delhi: Inter-India Publications.

MANI, Vettam
1975 *Purāṇic Encyclopaedia.* Delhi: Motilal Banarsidass.

MAYRHOFER, Manfred
1963 *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen.* Band II: D-M. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.

MISHRA, Vijayakanta
1979 *Cultural Heritage of Mithila.* Allahabad: Mithila Prakasana.

MITCHINER, John E.
1982 *Traditions of the Seven Ṛṣis.* Delhi: Motilal Banarsidass.

OLDENBERG, Hermann
1917(1970) *Die Religion des Veda.* Stuttgart: J. G. Gotta'sche Buchhandlung (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft).

OPPERT, Gustav
1893(1972) *On the Original Inhabitants of Bharatavarsa or India.* Westminster: Constable (Delhi: Oriental Publishers).

PADOUX, Andre
1987 Un rituel hindou du rosaire (Jayākhyasaṃhitā, chapitre 14). *Journal asiatique* 275: 115–129.

PANDEY, Rajbali
1969(1982) *Hindu Saṁskāras. Socio-Religious Study of the Hindu Sacraments.* (Delhi: Motilal Banarsidass).

PARPOLA, Asko
1981 On the Primary Meaning and Etymology of the Sacred Syllable OM. *Proceedings of the Nordic South Asia Conference held in Helsinki, June 10–12,* 1980. (=Studia Orientalia ed. by The Finnish Oriental Society. Helsinki).

SHAH, P. G.
1938 Origin of Śālagrāma and Tulasī worship. *The Anthoropological Society of Bombay Jubilee volume,* pp. 207–235.

SMITH, Frederick M.
1987 *The Vedic Sacrifice in Transition. A Translation and Study of the Trikāṇḍamaṇḍana of Bhāskara Miśra.* Bhandarkar Oriental Series No. 22, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

SMITH, W. L.
1980 *The One-eyed Goddess. A Study of the Manasā Mangal.* Stockholm: Almqvist & Wiksell International.

SRINIVASAN, Doris
1973 Saṃdhyā: Myth and Ritual. *Indo-Iranian Journal* XV: 161–178. The Hague: Mouton.

TACHIKAWA, Musashi
1983 A Hindu Worship Service in Sixteen Steps, Shoḍaśa-upacāra-pūjā. 『国立民族学博物館研究報告』8(1): 104–186。

VARENNE, Jean
1960 *La Mahā Nārayaṇa Upaniṣad.* Tome premier: Texte, Traduction, Notes. Tome second: Etude, Tables, Indez et Appendices. Paris: E. de Boccard.
VIDYĀRṆAVA, Rai Bahadur Srisa Chandra
1918(1974) *The Daily Practice of the Hindus containing the Morning and Midday Duties.* The Sacred Books of the Hindus, vol. 20. Allahabad: The Indian Press (New York: AMS Press).
WEBER, Albrecht
1863(1973) Über die Metrik der Inder. *Indische Studien*, 8. Band, Leipzig: F. A. Brockhaus (Hildesheim: Georg Olms Verlag).
1865(1973) Analyse der in Anquetil du Perron's Uebersetzung enthaltenen Upanishad. *Indische Studien*, 9. Band, Leipzig: F. A. Brockhaus, pp. 1–173 (Hildesheim: Georg Olms Verlag).
WILLIAMS, Monier
1883(1974) *Religious Thought and Life in India.* London: John Murray (New Delhi: Oriental Books Reprint Corporation).
WINTERNITZ, Moriz
1908(1968) *Geschichte der Indischen Literatur.* Bd. I. (Stuttgart: Koehler Verlag).

サンスクリット文献

Atharvaveda
Atharva Veda Sanhita. hrsg. von R. Roth und W. D. Whitney. Dritte, unveränderte Auflage. 1966. Bonn: Ferd. Dummlers Verlag.
Devībhāgavata Purāṇa
The Devībhāgavatapurāṇam. ed. by Puṣpendra Kumāra. 1986. Delhi: Nag Publishers.
Garuḍa Purāṇa
The Garudamahāpurāṇam. 1984. Delhi: Nag Publishers.
Mahābhārata
The Mahābhārata. For the first time critically edited by Vishnu S. Sukthankar with the co-operation of many scholars. 1933–1959. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
Manusmṛti:
The Manusmṛti with the 'Manvartha-Muktāvalī' Commentary of Kullūka Bhaṭṭa. ed. by Gopāla Śāstrī Nene. The Kashi Sanskrit Series 114. 1982. Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan.
Nārada Purāṇa
The Nāradīyamahāpurāṇam. ed. by Cārudeva Śāstrī. 1984. Delhi: Nag Publishers.
Padma Purāṇa
The Padmamahāpurāṇam. ed. by Cārudeva Śāstrī. 1984. Delhi: Nag Publishers.
Pāraskara Gṛhyasūtra
Grihya-Sūtra by Paraskar ed. by Mahadeva Gangadhar Bakre. 1917. Bombay: Gujarati Printing Press (1982 New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers).
Purāṇāgnihotra Upaniṣad
Varenne 1960, tome second, pp. 102–111.
Ṛgveda
Die Hymnen des Ṛigveda, hrsg. von Th. Aufrecht, 2 Bde. Indische Studien VI, VII. 1861, 1863. Berlin: Ferd. Dummler's Verlagsbuchhandlung (1973 Hildesheim: Georg Olms Verlag).

Śabdakalpadruma
The Śabdakalpadruma ed. by Rāja Rādhākānta Deva. Reprint. 1988. Delhi: Nag Publishers.
Śaṅkha Saṃhitā
in Dharmaśāstrasaṃgraha, vol. 2, pp. 343–374, ed. by Pandit Jīvānanda Vidyāsāgara. 1876. Calcutta.
Śatapatha Brāhmaṇa
The Śatapatha-Brāhmaṇa. ed. by Albrecht Weber. 1855. Berlin-London (1964 Varanasi: The Chowkhamba Sanskrit Series Office).
Skanda Purāṇa
The Skandamahāpurāṇam. Vol. 4. 1987. Delhi: Nag Publishers.
Taittirīya Āraṇyaka
The Taittirīya Āraṇyaka of the black Yajur Veda, ed. by Rājendralāla Mitra, 2 Vols. Bibliotheca Indica, 1872. Calcutta.
Taittirīya Saṃhitā
Die Taittirīya-Saṃhitā, hrsg. von A. Weber. Zweiter Teil. Indische Studien 12. Band. 1872. Leipzig: F. A. Brockhaus (1973 Hildesheim: Georg Olms Verlag).
Vājasaneyi Saṃhitā
The Vājasaneyi-Saṃhitā in the Mādhyandina and the Kāṇva-Śākhā with the Commentary of Mahidhara. ed. by Albercht Webr. 1852. London (1972 Varanasi: The Chowkhamba Sanskrit Series Office).
Viṣṇu Purāṇa
The Viṣṇumahāpurāṇam ed. by Rājendra Nātha Śharma. 1985. Delhi: Nag Publishers.

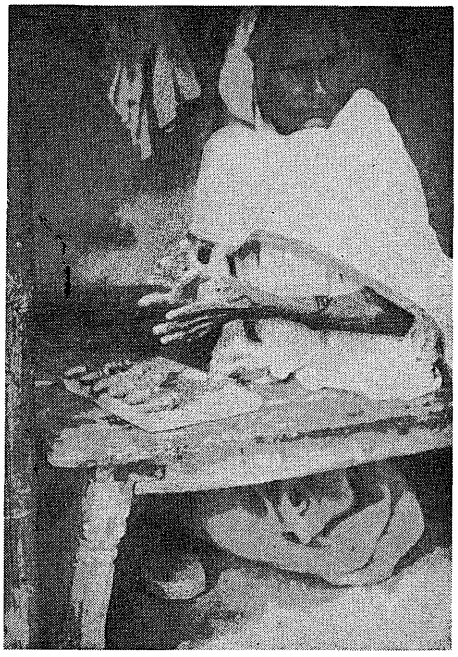

写真1

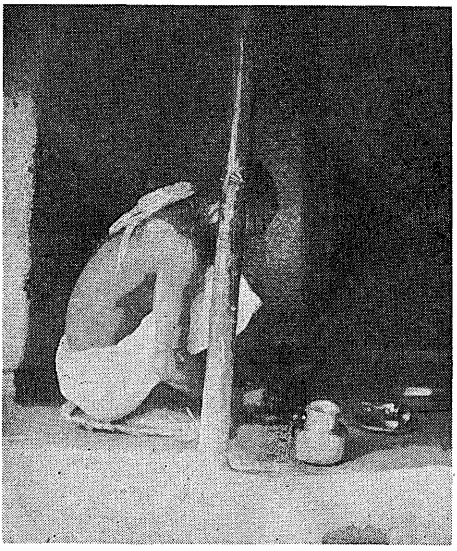

写真2

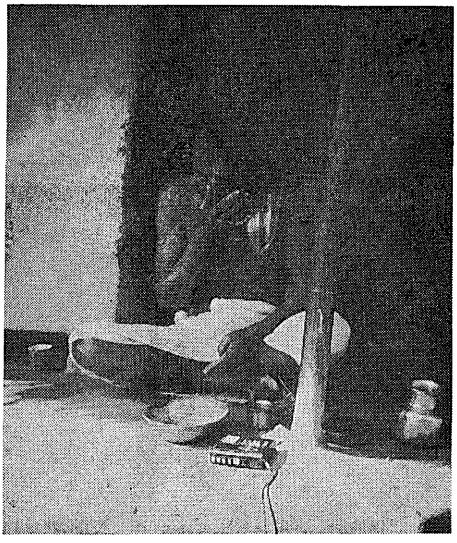

写真3

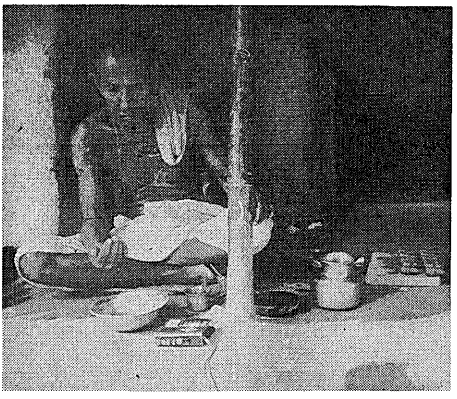

写真4

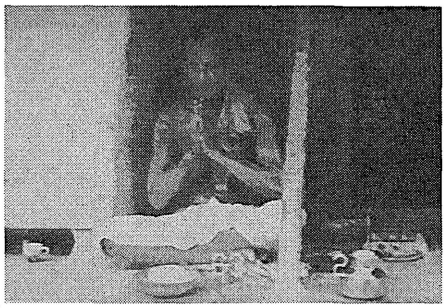

写真 5

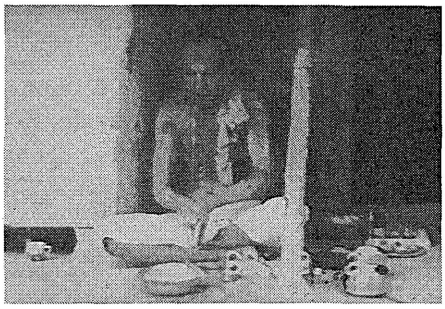

写真 6

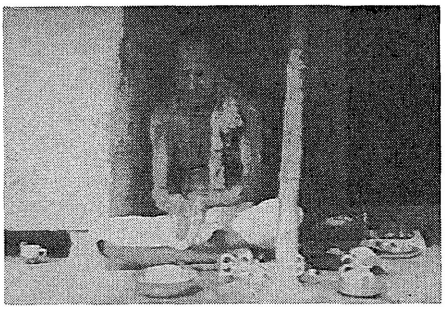

写真 7

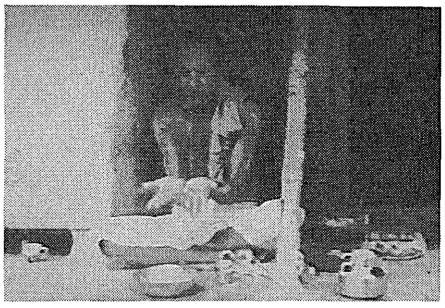

写真 8

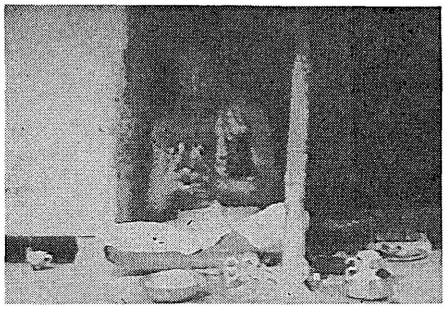

写真 9

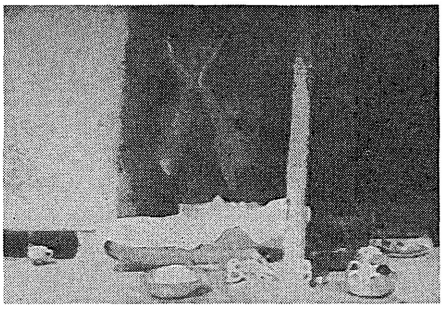

写真10

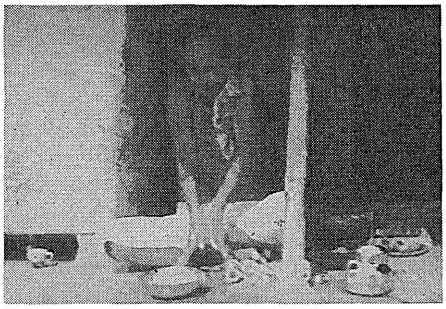

写真11

写真12

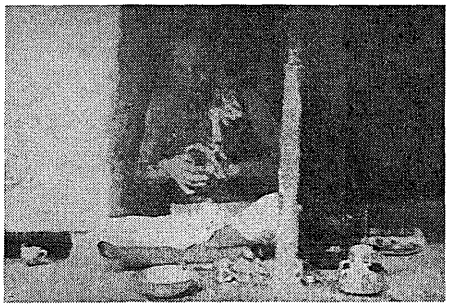

写真13

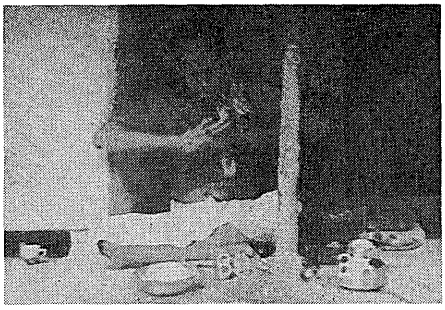

写真14

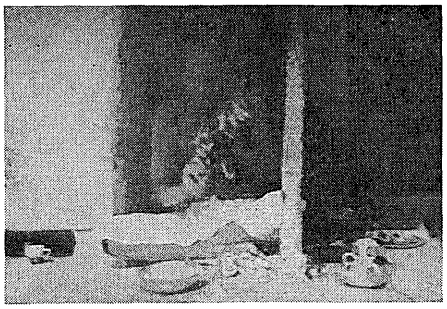

写真15

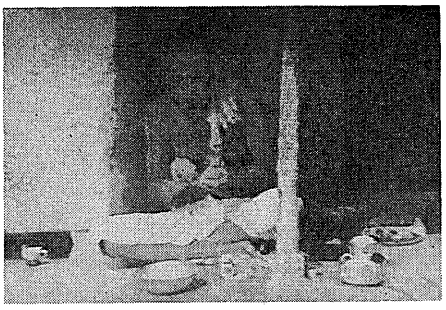

写真16

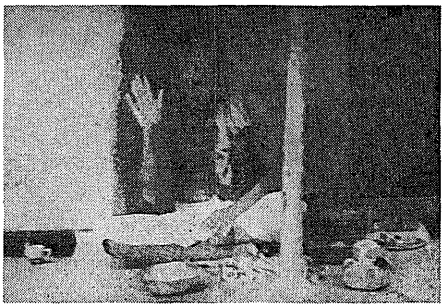

写真17

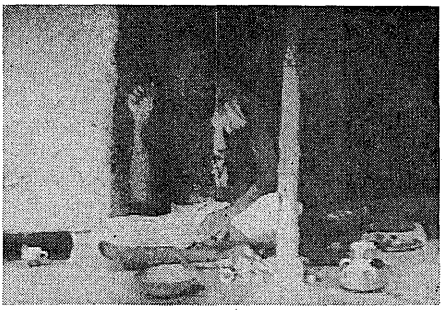

写真18

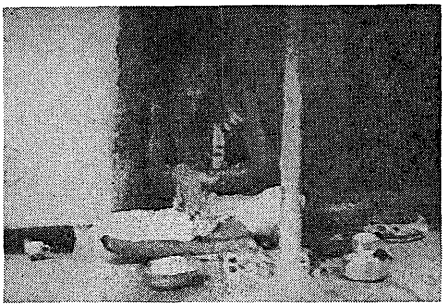

写真19

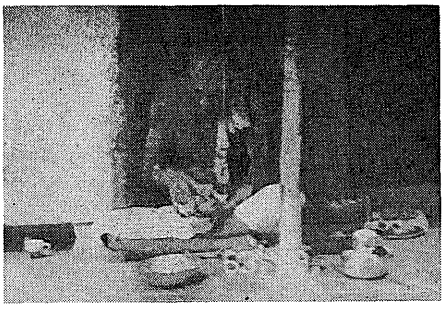

写真20

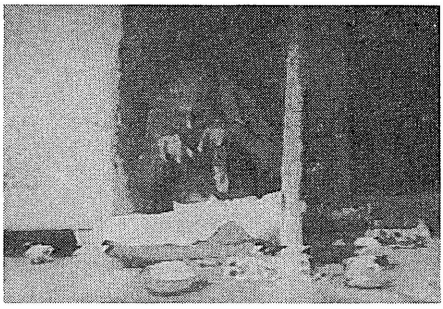

写真21

写真22

写真23

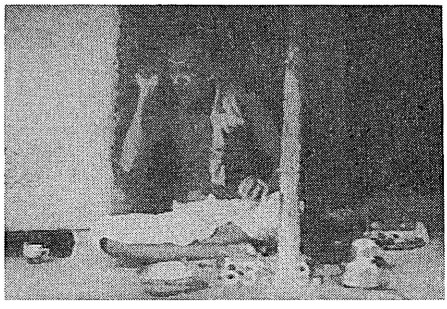

写真24

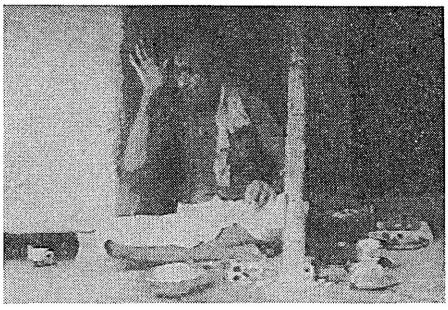

写真25

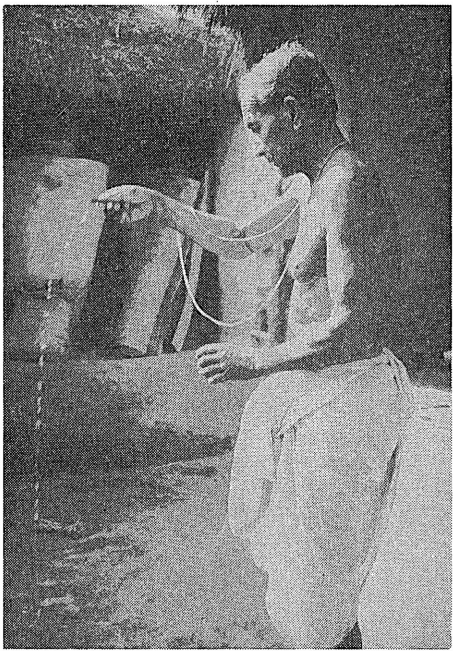

写真26

写真27

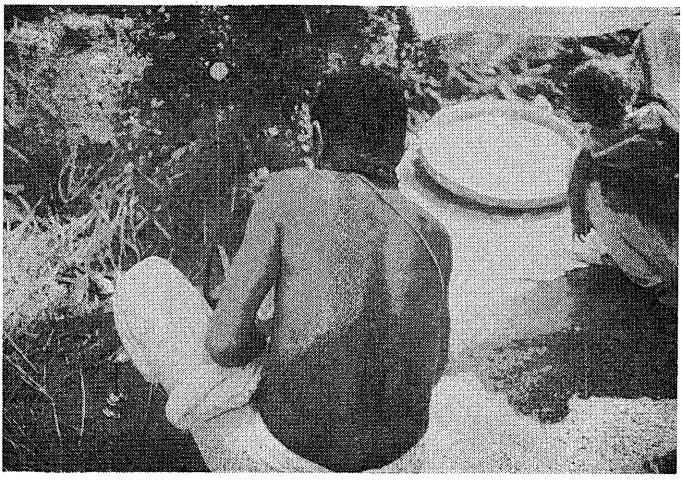

写真28

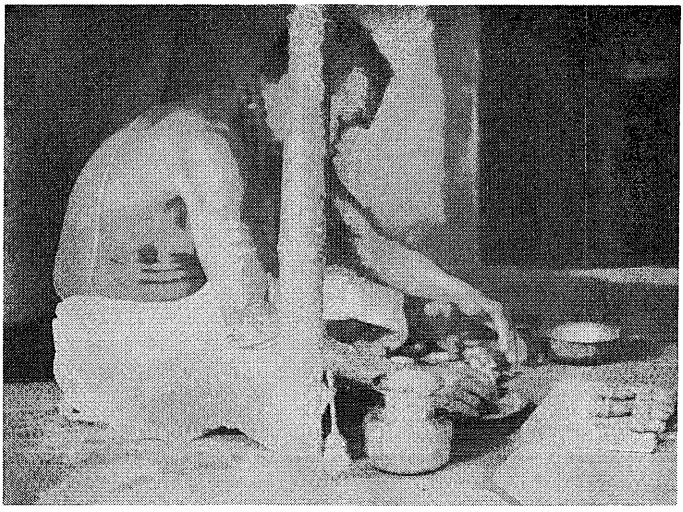

写真29

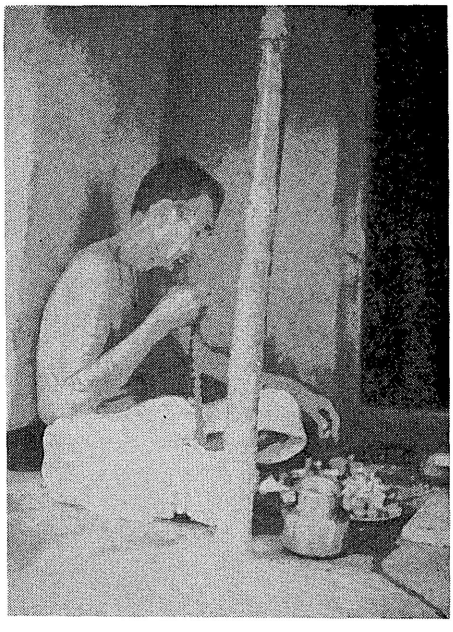

写真30

写真31